

## 市場と文明の進化誌 ⑥

石 井 和 彦

### 政治都市メッカ

こうした動きを先導する役割を担ったのが政治都市メッカ（現称マッカ・古称マコラバ）であり、そこを本拠にしたクライシシュ部族（ニザール族と呼ばれる代表的北アラブ人の一分派）だった。

アラビア半島西岸には、古代後期より半島を南北につなぐ陸上ルート、高原キャラヴァンルートが走っている。そしてこの高原ルートは前一世紀前半以来、イエメンからシリア・エジプトに向けて「香料」を運ぶ交易路として知られてきた。

この交易路のほぼ中央に位置したのが、ヒジャーズ地方の都市メッカである。ヒジャーズ地方は火山性砂礫丘陵からなり、農耕地には恵まれなかった。メッカもまた丘陵に囲まれた涸れ谷の谷間に位置し、農耕地と呼べるようなところはほとんどなかった。メッカは、最初から他地域市場との交流を前提にして生まれた都市だった。それも遠隔地市場と結びついて成立した政治都市だったのである。

メッカは、半島を南北に結ぶ高原キャラヴァンルートの中央に位置するだけでなく、そこで東西の交易路が交差する十字路の都市だった。東にいけば、ネジド台地・ナフード砂漠を越えてメソポタミア下流地方とつながった。西には外港ジッダ（ジユッタ）が配されていた。

ジユッタは、イエメンやインド洋諸地域から来航する海洋船や紅海の北域用平底船が積み荷を交換する仲継ぎ港だった。メッカはこの外港を通して対岸アフリカの交易港と結びつき、食料品のほかに、奴隷・金・象牙・薬物などアフリカの特産物を自己の市場に運び、それによって生計を立てる交易都市だったのである。

メッカはまた、ヒジャーズ地方の古くからの聖地の一つであると同時に、各地の聖地を結ぶ巡礼ネットワークのかなめとして、つねにたくさんの人々を集めることによって成立した巡礼都市でもあった。

それだけではない。この都市は「ザムザムの井戸」と呼ばれる名高い水場をもっていた。一年の大半が乾燥期となるアラビア半島では、こんなと湧きでる清水に恵まれたメッカは、どこよりも多くの隊商や動物が集結するオアシス都市であった。

アラビア半島の各地に政治都市市場のネットワークが広がっていくなかで、メッカは紅海・エジプト軸を中心とする交易システムの要石となる条件を備えていたのである。

#### クライシユ部族

そのメッカを手のうちにいれたのが、都市の東側周辺で遊牧・交易生活を送っていたクライシユ部族だったのである。五世紀末、メッカを征服した彼らは、このスークをアラビア半島を代表する重要交易市場の一つに仕上げていくのである。

クライシュ部族はメッカをどこよりも大きな聖地につくりあげようとした。近隣の諸部族が信仰する部族神やその崇拜物をこのカーバ神殿に集め、それを保管・管理する役目を負ったのである。そしてカーバ神殿に詣でる巡礼たちのためのルートの整備、メッカにおける滞在の自由と安全の保障、豊富な食糧・飲料水・娯楽品の提供などの役割を担った。

クライシュ部族は、メッカをこうした普遍的な聖地にすることによってアラビア半島各地の諸部族をここに集め、あくまでも部族を中心に生活するアラブ人に、一つの精神的連合世界を準備したのである。これによってメッカのスークは、どこよりも大きな地方的交易市場になった。

メッカのスークを主要交易市場に仕立てあげたクライシュ部族は、六世紀前半その力をてこに新しい冒険に乗りだしていくのである。国家・行政を代理する交易者としてではなく、一族の利益・繁栄を追求する商人として、インド洋圏と地中海圏とのあいだを結ぶ国際的商業に挑戦していくのである。

この時代、アラビア半島西岸の高原キャラヴァンルートを舞台にした二大洋圏間の交易は、二つの季節に分かれて展開された。一つは夏季の西風を利用して、地中海周辺地域からシリア・パレスティナ海岸の交易港に集まった商品をイエメン方面に運ぶ夏交易、いま一つは北東のモンスーンを利用して、インド・東南アジア方面からイエメンの交易港に集結する物産をシリア・エジプト方面に移動させる冬交易である。

クライシュ部族は交易者ではなく、商人としてこの二つのキャラヴァンに参画したのである。この時期まだ個別組織を単位とする商業経営の歴史は浅い。資本の調達も人材の獲得も、不特定多数の世界から期待することはできなかった。彼らは、家族・同族の共同資本によってキャラヴァンを組織し、その利益を公平に分配する、いわば血のきずなをベースにした商業経営を展開したのである。

国家を背景にしない商品の移動・通過・販売の自由、商人の生命・財産の安全の確保も、非常にむずかしい問題だった。クライシユ商人は、ビザンツ帝国の地方官、有力アラブ諸部族の長老など、交易路上の大いなる権力を相手に交通・滞在・取引の総合的安全保障契約を結ぶことによってこの問題を解決しようとしたのである。

血のきずな・政治的交渉力を利用した商業活動は大きな力を発揮した。クライシユ商人は、これによってイエメン地方からの芳香・樹脂類、明礬・紅玉寶石、エジプト・シリア市場経由の油脂・乾ブドウ・酒類・穀物・武器・金属加工品類・衣料品、エチオピア産の金・奴隷・象牙、さらには各仲継ぎ市場に集まるラクダ・馬・ロバ・乳製品・皮革類・織物などの仲介貿易に従事し、莫大な利益を獲得した。

#### イスラム教・イスラム共同体

商人としての国際商業への進出は、クライシユ部族に豊かな富をもたらし、政治都市メッカを大きく繁栄させた。しかしクライシユ商人が遂行した商業は未成熟で荒っぽかった。富裕者だけの協約によって経営された独占事業で、暴利的・投機的であった。そうした商人（商業）を中心に組織・運営されたスークは、富に対するはげしい欲望をつくりだし、人々のあいだに著しい貧富の差をつくりだした。また富への欲望・社会的格差は、血のきずなで結ばれてきたアラブ部族社会の伝統的な倫理・道徳を破壊した。その結果、家族・氏族・部族の内部で、あるいはそれぞれのあいだではげしい対立・抗争が発生した。

それだけではない。都市メッカの突出した富の蓄積・繁栄は、他の交易都市や遊牧系諸部族とのあいだに、新しい価値と伝統的価値をめぐる熾烈な対立・抗争を生みだしたのである。

これは、農耕社会から商業社会への移行がつくりだした矛盾であった。これを解決するためには、市民が商人を

中心にきびしく自己を規制しつつみずからの手で組織・運営する新しい市場がつけられねばならないし、そのセルフコントロールされた市場システムによって庶民の自由を実現する新しい文明が形成されねばならなかった。そうした新しい市場と文明の創出によって部族社会が利害の対決を乗り越え、より大きな単位の社会、民族社会にかわらねばならなかった。

七世紀アラブ世界は、それを可能にする一つの方法を生みだすのである。それがイスラム教とイスラム共同体の創出・普及である。

イスラム教は、ユダヤ教・キリスト教を母体にして誕生した一神教である。唯一絶対の神（アッラー）を想定し、アッラーが是認し、人々がその絶対の神に帰依することを誓うことによって成りたつ、一つの信仰の宗教である。しかしイスラム教の大きな特徴の一つは、信仰を信仰だけにおわらせず、それを実際の行為にまでおよばせようとするところにあった。

そのためにイスラム教は、信者の日常の生活の隅々にまで、つまり生誕・結婚・相続などの親族問題、売買・契約・訴訟などの社会生活、さらには統治・戦争・平和といった国家的事項にまでさまざまな指示・規定を設け、それを遵守させようとする一つの法体系（イスラム法）をつくりあげるのである。

それだけではない。イスラム教は、正しい信仰と行為をきずなしにして、宗教・政治・軍事・経済・社会を渾然一体化させたイスラム共同体の形成をめざすのである。

#### はげしい抵抗

そのイスラム教・イスラム共同体の創出・普及者となる運命をもたされたのが、預言者ムハンマドである。彼

は、六世紀後半から七世紀前半にかけて高原キャラヴァンルートを使って国際商業をリードしたクライシュ部族（の一氏族ハシム家）の出身である。彼は商人の目をもって、個別の組織・個人によって営まれる商業という新しい産業、それを主導力にして成りたつ商業生活がアラブ人の未来の設計に大きな可能性をもっていることを直観していたのであろう。

いまは旧秩序（農耕文明）から新秩序（商業文明）への移行期にあつて、社会は大きな混乱のなかにある。しかし商人を中心に市民がきびしい自主管理によって自由を実現することができれば、新しい都市市場（商業都市市場）を形成することができるといふ。それによって都市庶民の夢（異境の産物の豊かな配分）を実現する新しい生活様式（商業文明）が出現する。そうすれば、アラブ人が部族を越えてより大きな単位の共同体（民族・国家）に結集することができるといふ。それによってアラブ人の輝ける未来が拓ける。預言者はそういうことを洞察したのであろう。

ムハンマドは、その洞察を新しい宗教と共同体の創出によって実現しようとした。彼はまず、これまでアラブ人が大切にしてきた先祖伝来の神々を超越する神アッラーをつくりだした。そしてはじめはアッラーの啓示によって、のちにはアッラーの名を借りて、アラブ人に秩序ある商業活動、欲求に対するセルフコントロール、貧者・弱者の救済による富の公平な分配などをきびしく求めていくのである。

さらには古代アラブ社会の伝統的基盤として神聖犯すべからざるものとされてきた「血のつながり」にもとづく部族共同体ではなく、超越神を中心に、共通の祭祀と共同の利害にもとづく広やかで自由な共同体を編成し、そこに参加するよう人々に命じたのである。

イスラム教・イスラム共同体の普及は、容易ではなかった。アラビア半島は、対決原理を文化の基層にもった世界だったからである。都市メッカのクライシュ商人たちは、ムハンマドとその教団にはげしく対抗した。イスラム

教が教える富の公平な分配、庶民の地位の向上が実現されれば、クライシシュ部族がここに君臨することはできなくなるからである。

クライシシュ部族のはげしい攻撃にあつて、ムハンマドはメッカを脱出し、その北方に位置する政治都市メディナ（別称アル・マディーナ・古称ヤズリブ）に移住することを余儀なくされた（聖遷・ヒジュラ・六二二年）。

### 商業文化の形成

メディナもまた高原キャラヴァンルートに位置する交易都市だったが、住民は二つの民族から構成されていた。南アラブ系のイエメン人とセム系のユダヤ人である。このうち、富裕階級としてメディナを支配していたのは後者だった。

このユダヤ人支配の地で、ユダヤ民族とその宗教（ユダヤ教）に出会ったことは大きかった。預言者とその教団は、それと対決することによってみずからの宗教理念を強化し、イスラム共同体を成長させるのである。

それだけではない。彼らはメディナを襲撃したメッカのクライシシュ部族との対決を通して、攻撃的性格を強めていくのである。教祖は単なる預言者ではなくなった。剛胆かつ細心な政治指導者、鉄の意志をもつ軍事指揮官に成長した。そして彼がつくりだした共同体もただの宗教共同体ではなく、強固な政治共同体、はげしい戦闘力をもつ軍事共同体になった。

そうした準備を都市メディナにおいて整えながら、ムハンマドは都市メッカに向け、反撃を開始したのである（六二四年）。メッカの生命線は、シリアとイエメンを結ぶ高原キャラヴァンルートだった。ムハンマド軍はそれを破壊してクライシシュ商業に決定的な打撃を与え、メッカを無血征服した（六三〇年）。メッカの住民はイスラム

教の信徒となり、都市メッカはイスラム共同体にかわった。

メッカ攻撃の前後から、ムハンマドはアラビア半島各地の部族社会に対してイスラム化を進めていたが、メッカの征服はその動きを加速させた。メッカが降伏し、イスラムの正当性が証明されると、アラビア半島全域がムハンマドの権力・支配下にはいった。それとともに各地が都市を単位にイスラム化しつつ、メダイナを中心とする一つの大きな宗教共同体に参加することになったのである。

こうしてアラビア半島には、対決と分裂をつづけてきたアラブ諸部族がムハンマドを中心に一つの民族として集する王国、アラブ王国が、そして唯一神信仰をもとに宗教・政治・軍事・経済・社会を渾然一体化させる新しい共同体、アラブ・イスラムが形成されたのである。

アラブ人は、ムハンマドの指導あるいはアッラーの教えにしたがって、アラブ王国、アラブ・イスラムを、都市を核にして運営しようとした。それも政治（行政）を中心に据える政治都市ではなく、商業（商人）を主導役とする商業都市を中核にして進めようとしたのである。

そうしながら彼らは、商業を中心に秩序ある市民共同体を形成して権力者から組織・運営の自由を獲得し、その自由を市民共同体によるきびしい自主管理によつて実現する新しい市場、商業都市市場をつくりあげようとした。そしてそれを首都メダイナの中央市場をネットワーク・センターにして交流させると同時に、異域の市場と結びあわせようとしたのである。

この試みは成功し、アラビア半島に商業都市市場の一つのネットワークができあがった。これによつて都市庶民に異境の産物を豊かに配分する商業生活が出現したのである。この生活様式は、アラブ人がその故地、アラビア半島を舞台に固有の生態系と歴史をもとにつくりあげた一つの文化であった。この商業文化は、半島にとどまっては



いなかった。それは、預言者Ⅱ支配者ムハンマドの死後、西アジア・地中海（その周辺世界）に広がる普遍的文明化、すなわち商業文明Ⅰになるのである。

### 帝国の形成

商業文化の創造がそうであったように、その文明化を促したのもまた軍事力と宗教だった。

商業文明は、社会間の豊かな交流のうえに成立する。しかし西アジア・地中海にはまだそういう交流世界はつくられていなかった。すでに交易都市は存在していたが、それらはいずれも農耕文明を支えるためのシステムだった。アラブ・イスラムは、他の社会の成熟を待つことはしなかった。他国を軍事力によって征服し、そこをイスラム共同体につくりかえることによって交流世界を創出する道を選択したのである。そうすることによって商業文明を拡散させ、アラブ王国を発展させる道を選んだのである。

ムハンマドの他界後、アラブ・イスラムは預言者にかわる最高権威者を選びだした。「神の使徒の代理」、カリフ（アラビア語・ハリーファ・ラースル・アッラー）である。選出されたカリフは四代に渡った。いずれもムハammadの古くからの信奉者であり、教友であり、姻戚であった。ために後世のイスラム史家は、四者を「正統カリフ」と呼んだ。

アラブ・イスラムは、この正統カリフのもとに豊かな戦闘能力をもつアラブ系遊牧民を戦士・布教者として組織し、征服運動（聖戦・ジハード）を繰り返したのである。首都メデイナを發ったアラブ軍は、ビザンツとササニンの両帝国に向かい、ヘレニズム世界とイラン世界の統合をめざした。

シリア・パレスティナ方面に向かったアラブ軍はダマスカスを占領し、レバノンのヤルムーク河畔の戦いでビザ

ンツ軍を打ちやぶって、シリア全土（現在のシリア・レバノン・ヨルダン・イスラエルを合わせた地域）をほぼ征圧した（六三六年）。またアラブ軍はエジプトに侵攻し、ビザンツ軍を撤退させ、地中海南岸ぞいに西進してリビュアを席巻した。

イラクに向かったアラブ軍は、サーサーン朝の都クテシフォンを占領、さらにイラン高原に進撃してサーサーン朝を滅亡させ、イラン全土をカリフ領とした（六五一年）。

征服事業の目的は、占領した都市・農耕地からの略奪ではなかった。アラブ・イスラムは戦略・交通上の要地に軍营地（ミスル）を建設して占領地を支配し、そこから地租税（ハラージュ税）を徴収する新しい国家を建設しようとしたのである。

それだけではなかった。彼らはその広大な領地の要衝に、あるいはそこと他の世界とが接する境域地帯（スグール）に、アラブ戦士や増援軍をはじめとするアラブ系部族を移住させ、新国家の牽引者にしたのである。

こうしてアラブ・イスラムは、ムハンマド没後わずか二〇年で、東はイランから西はリビュアにいたる広大な世界に、カリフを頂点としアラブ移民と被征服民とによって構成される巨大帝国を建設したのである。

#### ウマイヤ朝の成立

征服運動は、さらに進められた。それを担ったのがイスラム帝国のシリア総督職で、シリアのアラブ人の支持によって世襲制のカリフとなったウマイヤ朝（六六一―七五〇年）である。

ムハンマドの後継者は「神によって正しく導かれたカリフ」であるはずだったが、現実にはその選出はなかなかむずかしかった。カリフ権をめぐる争いは熾烈をさわめた。その争いのなかでスンナ派とシーア派の二大宗派が生

まれたが、多数派のスンナ派イスラム教を国教にしてアラブ帝国の政権をとったのが、ウマイヤ朝だったのである。

ウマイヤ朝アラブ帝国は、メディナにかえてシリアのダマスカスを首都にし、ここを基点に征服運動を再開した。それはすさまじい戦闘力だった。アラブ軍はまたたくまに、東はホラーサーンを越えたシンド地方、北はブハラ・サマルカンドに代表されるマーワランナフル、西はマグリブ（北アフリカ）を征服した。マグリブでは征服したチュニジアのベルベル人を参加させ、イベリア半島に侵攻してアンダルシア地方まで支配したのである。

ウマイヤ朝はその後期には征服事業に暮をおろし、世襲制カリフの絶大な権力によって占領地に対する本格的な行政統治をはじめた。彼らは帝国内の交通・運輸・戦略上の要地に、都市をつくりだした。それらははじめは占領地の統治の拠点、あらたな軍事行動を展開するための前哨基地・物資の補給地として準備された軍营地だったが、やがて都市計画にもとづく街区が配され、戦士をはじめとするアラブ系諸集団、宗教を異にする人々、さまざまな職業集団が移りすみ、軍隊の駐留、行政・経済活動、情報交流の総合機能を果たすイスラムの新しい商業都市となった。

そうした軍营地＝商業都市として知られるのがイラク地方のバスラ、クーファ、イラン・ファールス地方のシーラーズ、シリア地方のラムラ、エジプト地方のフスタートなどである。ウマイヤ朝は、こうした商業都市を既存都市のあいだに配し、新旧の都市群を交流させようとした。そのために彼らは首都ダマスカスと地方都市とを結ぶ駅通制度（バリード・システム）を拡充したり、アラブ式貨幣の鑄造、度量衡の改革、アラビア語による公用語の統一を進めたりした。

これによって中央アジア・西アジア・北アフリカ・イベリア半島にまたがる広大な地理空間に、古代的・農耕的

な交易世界を越える中世的・商業的交流世界が拓かれたのである。

しかしその交流世界には大きな限界があった。征服者アラブ人と被征服民の統一が実現されなかったからである。ウマイヤ朝が政権の中心をおいたシリアは、ユーラシア大陸とアフリカ大陸の接点で、しかも地中海とインド洋を結ぶ国際的商業の要衝だった。古来さまざまな国家・民族が興亡を重ね、多種多様な文化が重層化された先進の文明地だった。アラビア半島に誕生した荒削りなイスラム信仰、それを核にしたイスラム社会は、この旧先進文明地で世界性・普遍性をます体験を積んだ。

アラブ帝国はこの体験をもとに、いずれはアラブ人だけでなく、ここに参加したさまざまな民族をイスラムのなかに統合していくことになる。しかしウマイヤ朝時代にはそれは実現できなかった。この王朝はまだアラブ至上主義を濃厚に残し、それを貫こうとする征服者の体質から抜けでることができなかったからである。

ウマイヤ朝は民族の統合を果たせないまま、ビザンツ帝国を相手に東地中海の支配をめぐる長期戦に巻き込まれていく。そうしたなかで征服運動の再開を余儀なくされていくのである。しかし戦争・征服はもはや限界にきていた。アラブ戦士の活力が枯渇していたからである。戦いはイスラム教徒となったイラン系・ペルベル系の非アラブ人（マワリー）に担われるようになった。やがて彼らの力が、アラブ戦士のそれを凌いでいくのである。

それとともに帝国の各地でギリシア人・イラン系マワリー・コプト教会派キリスト教徒・ユダヤ教徒など、非アラブ系の人々の抵抗がはじまった。こうしてウマイヤ朝アラブ帝国は、その勢力を失っていくのである。

#### アッバース朝の登場

そうしたイスラム社会の内部矛盾を克服し、新しい秩序づくりをめざす運動が帝国の東（イラク・イラン）では

じまった。その担い手になり、ウマイヤ朝からカリフ権を奪取してイスラム帝国を再建したのがアッバース朝である。

アッバース朝イスラム帝国は、イスラム世界を安定させるには軍事力やそれに結びついたイスラム信仰だけではかぎりがあることを知っていた。彼らは、人々がイスラム信仰による共通の心性、同一の生活様式をもって参加することのできる均質で開かれた社会を創出しようとした。

アッバース朝はまず、イスラム社会の頂点となるカリフの地位を大きく引きあげた。カリフを「神の使徒の代理」ではなく、地上における「神の代理」にかえたのである。

彼らはカリフ権を預言者からではなく、直接アッラーから授かった究極の権威であるというふうにしてカリフの神格化を進めながら、人々のあいだにイスラム信仰を浸透させようとした。そしてイスラム世界がこれまで内包してきたアラブ諸部族間の系譜や階層の違い、あるいはイスラム世界を構成する諸民族間の出自や地域ごとに異なる伝統の差をなくそうとしたのである。

さらにはイスラム以外の異教徒たちが、広く文化的・経済的活動を展開することのできる開かれた社会を形成しようとした。そうしながら、神格化されたカリフを頂点とする強大な中央集権国家の建設・運営をめざしたのである。

もちろんこれによって、完全な中央集権社会が実現できたわけではない。アッバース期にも各地に小独立国が生まれ、アラブ系遊牧集団の侵略があった。また中央ではさまざまな権力抗争・社会運動が起きた。しかし均質社会・開かれた社会をめざす統一国家づくりは、西アジア・地中海の人々に熱狂的に支持され、受け入れられた。こうしてアッバース朝イスラム帝国は、八世紀半ばから一〇世紀半ばまでの約二〇〇年間、異質性・多様性を克服

し、同質的かつ開かれた世界を実現させたのである。

### 商業都市の創出

こうした均質で開かれた社会の形成をめざしながら、アッバース朝イスラム帝国は、異境の産物の豊かな配分を実現する商業文明Ⅰの形成に向かった。その主要舞台となったのが、イスラム都市と呼ばれる商業都市だった。

帝国の周囲には、四つの異域が存在していた。北方ユーラシア、インド洋海域、ビザンツ・地中海沿岸、そして北アフリカである。また帝国の内部には、生態学的・歴史的・文化的条件の異なる多様な地方が組み入れられた。帝国は国外の異境とのあいだに太いパイプをつくりだすと同時に、国内の諸地方を豊かに交流させるために、農耕文明時代の統制的な政治都市にかえて、取引的交換機能を高めた商業都市を建設していくのである。

アッバース朝は、頂点に神格化されたカリフをいただく強大な中央集権的統治機構をもとに、アラブ軍営地に由来をもつ諸都市、サーサーン朝ペルシア帝国時代から発展してきたイラン・イラクの諸都市、中央アジアのオアシス都市、地中海沿岸の港湾都市など、帝国の版図にはいった各地の都市の整備に大きく乗りだした。

市壁・城塞を拡大し、モスク・スーク・広場・街区・マドラサ（学院）、郊外居住地・菜園地などを配備し、各都市にイスラム都市としての基本的な構造と機能を与えた。

イスラム都市の中核を形成したのは、モスクである。アッバース朝カリフ政権は、モスクのもつ宗教・社会・教育機能によって、都市をすべての人々に等しく開かれたムスリム共同体の理想の世界にした。そうしながらカリフ政権は、それらの都市群を統合するための首都を、旧サーサーン朝ペルシア帝国の首都クテシフォンに近い、ティグリス河西岸に建設した。三重の城壁で囲まれ、「平安の宮」と呼ばれたバグダードである。バグダードはもちろ

んイスラムの首都として帝国を統治するための政治都市ではあったが、そこにはこれまでのどの首都もおよばない大きな商業機能が組みこまれた。

バグダードからティグリス河をくだるとペルシア湾・インド洋に達する。イーサー運河を使ってユーフラテス河を溯上すれば地中海にいたる。東側に位置するホラーサーン・マールワンナフル地方と、西側に位置するヒジャーズ・エジプト・マグリブなどの諸地方を結ぶ東西軸の基点バグダードは、まさにイスラム世界の大十字路だった。カリフ政権は、この十字路に首都Ⅱ大商業都市を配し、それを中枢にして帝国各地の諸都市を結びあわせようとしたのである。

#### 境域市場・都市間市場づくり

この交流を支えたのが、都市中心部につくられたスーク、商業都市市場である。

商業都市市場は、境域市場・都市間市場、そして都市市場より構成される。境域市場は異境に比較的近い都市に位置し、帝国と外国とのあいだの国際貿易を実現するための国際市場・調達市場である。

都市間市場は、首都ならびに帝国各地の主要都市におかれた市場で、境域市場と連絡しつつ、帝国内部の広域世界に貿易品や各地の特産物を移転させる交流市場・流通市場である。

都市市場は、境域市場・都市間市場、そのネットワークに直接あるいは間接に結びつき、都市に暮らす庶民に異境の産物や日々の生活品を配分する役割を担った生活市場である。帝国は、これら三つの商業都市市場を育みつつ、それを有機的に結びつけようとしたのである。

境域市場・都市間市場の基盤を整備したのは、国家である。アッバース朝は、イスラムの船舶がインド洋沿岸地

域に安全に向かえるように、ペルシア湾の海港諸都市に港や灯台を建設したり、航路を整備したりした。

遠隔地にわたる商業では、外地で死亡した商人の遺産処分、権力者による商品没収、金銭上の紛争、犯罪、損害賠償、漂流物占取権などさまざまな問題が発生する。この問題の解決に積極的な役割を演じたのも国家だった。イスラム世界ではすでにイスラム法の各学派による基本的解釈にもとづいて、イスラム商人の行動に法的保障が与えられていた。カリフ政権はこの法にもとづき、異境で商人の私有財産が没収されたり、商人の自由・安全・通行の権利が侵されたりすることのないよう配慮したのである。

アッバース朝国家は、帝国各地の諸都市間市場からバグダード市場に向かって集中し、同時に首都市場から各地の都市間市場に向かって放射する交通・運輸網やバリード・システムをつくりあげた。駅遞制度は、ウマイヤ朝時代にもつくられてきた。アッバース朝はそれを再統合し、東はマールワナフル・シンド地方、西はエジプト・マグリブにおよぶ広大な世界に配された都市間市場を結ぶ宿駅のネットワークをつくりあげたのである。

この時代陸上の遠隔地輸送手段は、ラクダ・馬・ラバ・ロバであった。これらの駄獣によって編成されるキャラヴァンが移動できる距離は、一日平均二五—三〇キロメートルだった。<sup>(1)</sup>その移動距離に合わせて宿泊地が必要だった。国家は、商人たちが首都市場と帝国各地の都市間市場を結ぶネットワークのかなめに商人用宿泊施設・水場・倉庫を建設するのを積極的に支援した。

### 遠隔地商人

こうした国家による基盤整備に応じて、境域市場・都市間市場形成の主役となったのは商人、とりわけ遠隔地商人である。



すでにウマイア朝後期（征服と移住の時代がおわったころ）、アラブ貴族を対象とする奢侈品貿易、国家の必要とする行政・軍事物資の調達、軍営地内の卸売・小売などの分野で職業的に専門化した商人層が出現していたが、八世紀半ば以後になると商業の可能性が大きく拓かれ、多くの人々が遠隔地商人として生きるようになった。

この時代遠隔地商人の活動を大きく支える役割を果たしたのが、イスラム教の信仰である。広い世界を舞台に長期間にわたる商業活動を実現するには、豊富な資本・人材・人脈が欠かせない。その獲得は親子・兄弟・親類縁者・同郷の団体など、血縁・地縁のネットワークからだけでは十分ではなかった。それを補完したのが信仰のネットワークだったのである。

イスラム信仰は人々の心を安定させ、商業活動に節度・秩序をもたらしただけではなかった。それは信者間に信頼関係をつくりだし、資本・人材・人脈供給の源泉となったのである。商人たちはイスラム信仰への寄与を忘れなかった。彼らは敬虔なムスリムとしてありつづけ、信頼のネットワークが生み出す豊かな資本・人材・人脈を確保し、遠隔地商業の可能性を切りひらいたのである。

この時代、さまざまな遠隔地商人が登場した。完全な商人だけではなく、学者あるいは土地所有者をかねた商人も多かったのである。遠隔地商人をその役割の違いによって大別すれば、つぎの三者になる。

第一は、境域・都市間市場の広大なネットワークを舞台に、みずから自国商品をたずさえて旅をしたり、手にいれた異境の産物を売りあるいたりする遍歴商人（ラッカード）。

第二は、商業都市を本拠に大規模な倉庫を構え、国家が租税として集めた穀物を落札・売却したり、各地方が供給する農産物その他（高級織物など）を大量に集荷・分散したりする蔵商（ハッザーン）。

第三は、境域市場・都市間市場に代理店網を築き、綿花・毛皮・織物・香辛料・薬物などの原料を輸出入した

り、各地の手工業者に原料・道具を貸与して生産・加工させた製品を売却したりする貿易商社（ムジャッヒズ）。

### 共同経営・連携組織

それではイスラム商業の精華、地中海やインド洋を舞台にする海上貿易に従事したのはどんな商人だったのだろうか。

海上貿易は輸出入品の調達・船舶の建造・船団の編成・航海・海外での商品売買・代理店の経営など多様な活動の組み合わせからなる。この時代にはその主要部分を一手に握れるような商人は存在しなかったことだろう。おそらくラッカード・ハッザーン・ムジャッヒズの三者がたがいに資金・労務・技術を提供しあい、共同経営を行なうたに違いない。

もちろん商人だけでは海上貿易は実現できない。彼らは船主・船舶経営者・代理人などとさまざまな参与契約を結んだり、連携組織をつくりだしたりしたことだろう。船団の規模によっては、それでも十分ではなかったはずである。そのとき商人たちは国家・王族・高級官僚・軍人・両替商・富裕地主たちにも出資をもちかけたことだろう。彼らは出資者と会社を組織し、アフリカ・インド・東南アジア・中国の港湾諸都市との商用航海に乗りだしたにちがいない。

共同経営・連携組織は海上貿易だけではなく、すべての遠隔地商業に共通の行動様式であったことだろう。商人たちはそれによって、かぎられた経営資源・不足する商業機能を補い、各地の気候、穀物の収獲状況、市況、治安状態などに関する情報を交換したはずである。

遠隔地商業を担ったのはアラブ人だけではない。イスラム教徒となったイラン人・ベルベル人・ギリシア人、さ

らにはコプト教会派キリスト教徒・ユダヤ教徒などもそれに参加した。遠隔地商人が活動の拠点としたのが、境域市場・首都市場・都市間市場である。彼らはそこから東は中国、西は大西洋におよぶ広大な世界を相手に利益の追求・資本の蓄積をめざした。

そうした無数の商人の営為の積みかさねによつて、イスラム世界には巨大な境域・都市間市場のネットワークが形成され、異境の産物が大量に流通していくのである。

### 境域商品

イスラムの境域・都市間市場システムに流通した異境の産物の代表は、帝国のそこから運ばれる非イスラム世界の物産である。<sup>(2)</sup>

第一は、マールワナンナフル地方を境域市場とし、そこに運ばれる中央アジアのシルダリア川河畔およびヴォルガ川流域の物産である。アルタイ山脈からキルギス平原にかけて東西に帯状に広がったステップ地帯が産する家畜（馬・ラバ・羊・ヤギ）、乳製品・皮革・羊毛・鉄製品・武器、北方ユーラシアの森林地帯の動物毛皮（貂・銀狐・灰色リス）、琥珀・翡翠・瑪瑙・海獣歯牙、パミール高原およびチベット・ヒマラヤ産の鉱物資源（銀・銅・鉛・水銀・砂金）、宝石・じゃ香がそれである。

第二は、インド洋海域の物産である。ペルシア湾と東アフリカ海岸・島嶼部とを結ぶネットワークにもたらされる象牙・犀角・皮革・奴隸・金・マングローブ材・たいまい・熱帯産果実・香葉類などの第一次産品、ペルシア湾の諸港と中国の広州・温州・杭州・揚州を結ぶネットワークを介してもたらされる東南アジア産の沉香・白檀・樟腦・丁香・肉桂・生薬・じゃ香・桂皮、そして中国産の絹織物・錦織・陶磁器・漆器・青銅容器・銅銭・

紙・墨・鏡・馬具・装身具などがそれである（これらは西アジア産のガラス・木綿・亜麻布・毛織物、南アラビア産の乳香・没薬・龍涎香、東アフリカ海岸産の象牙・犀角・動物皮革、ペルシア湾産の真珠、地中海産の珊瑚などと引きかえに運ばれた）。

第三は、アルメニアおよびビザンツ帝国産の産物である。絹織物・カーペット・果実・鉱物資源（銀・鉄・銅・水銀・錫）、木材・塩、宝石・武器類などがそれである。

第四は、マグリブを境域市場とし、そこに接するサハラ南縁部の産物。たとえばスーダン金や奴隷である（これらはムスリム商人のもたらす馬・岩塩・織物・銅製品と交換された）。

### 手工業品

イスラム世界の境域・都市間市場のネットワークに流通したのは、周縁世界からもたらされる境域商品だけではなかった。イラン・イラク・エジプトから構成される西アジア・地中海の地理的・生態的諸条件が生み出す手工業製品もまた、異境の産物として流通をはじめたのである。

西アジア・地中海は、古来から織物（木綿・亜麻布）・金銀細工・ガラス工芸・染色など多様な手工業を育んできたが、その流通量は小さく、流通範囲も狭かった。イスラム世界全域に渡る境域・都市間市場システムの形成は、旧来の手工業に大きな変化を与えた。市場のネットワークを通じて、手工業生産に必要なさまざまな原材料・半製品が、イスラム世界の隅々から、さらにはそのさきの境域世界から大量に運びこまれるようになったからである。

素材の調達と製品の生産がどこでも同じように行なわれたわけではない。さまざまな市場条件に合わせて、地方

間で多彩な分業体制が育まれた。その分業システムを組織したのが商人だった。商人主導の分業システムによって多量に生産された手工業製品が、これまた商人の手で境域市場に向けて送りだされる貿易品となったり、イスラム圏の諸都市間市場に向けて流通する特産物になっていくのである。

### 農産物

農産物もまた異境の産物に変化した。都市庶民が潤沢な食料供給を望むようになり、近在ものだけではまかなえなくなったからである。それだけではない。人々がこれまで乾燥地帯にはなかった新種作物の配分を求めるようになるからである。農耕は、市場のネットワークに向けて供給される商品をつくるための産業、農業にかわった。

このことは、農システムの大変革を意味した。まず農業の基盤が整備されねばならなかった。それを先導したのは、もちろんカリフ政権である。彼らは、農耕文明Ⅱ時代にここに発展した灌漑システムを再編成しつつ、その規模をはるかに越える運河網・水門・ダム・カナートを建設し、さらに家畜や水車を動力とする揚水施設を配備したのである。

こうした国家の基盤整備に合わせるようにして、大商人たちが農業にかかわりだした。農園の出資者・経営者となり、境域・都市間市場システムの動向に対応して遠隔地向け農作物の開発・出荷をはじめたのである。

商人たちは、移住労働者の使用、肥料の多量投入、役畜の集約的な活用、耕起方法の変革、品種の改良、新作物（東南アジア・インド方面からもたらされたサトウキビ・バナナ・マンゴー・柑橘類などの熱帯・亜熱帯原産作物）の導入を進めていくのである。

農耕文明Ⅱ時代、西アジア・地中海の農耕は冬作の二圃農耕だった。農業の市場化・商業化は夏作を実現させ、

二期作を生みだした。さらには裏作をつくりだし、多毛作を進展させていくのである。

メソポタミア・エジプトの穀倉地帯は、大麦産地から小麦の重要な供給地にかわった。この時代、米の栽培も普及した。それ以前、米の産地はイランのカスピ海沿岸にかぎられていた。それが九世紀後半からは、イラクのティグリス・ユーフラテス河流域にまで広がったのである。

果樹栽培は、北部メソポタミアからシリア・レバノン・パレスティナにかけて、さらにはエジプト・マグリブなどにも広がった。これまでのリンゴ・ブドウ・イチジク・アンズの栽培に加えて、オレンジ・レモン・バナナ・マンゴウづくりが定着をはじめたのである。

工業原料作物も大量に栽培されるようになった。エジプト（ファイユームとナイル・デルタ）では亜麻が、シリア・パレスティナでは綿花が栽培された。香料・薬味・薬品・染料となる作物もまた各地に広がり、その地の特産物になったのである。

こうしてイスラム世界の農作物が、商人の手を介し、異境の産物として帝国の境域・都市間市場のネットワーク上を移動したのである。

### 都市市場

境域・都市間市場システムに連動し、商業都市に暮らす市民（と周辺農民）に、こうした異境の産物を配分する役割を果たしたのが、都市市場である。

都市市場の形成に大きな役割を担ったのは国家である。国家は都市の中心に市場施設を建設すると同時に、その一角に商人の倉庫兼取引所を含む商業用施設・外国人居留地（マハッラ）、手工業者のための店舗・仕事場（ハー

ン）を配した。さらにその周辺には手工業者の製造所・居住空間をかねた街区（ハーヌート）、あるいは商人および手工業者の店舗・仕事場・倉庫・居住部屋が一緒になった総合施設（フندوقク）を準備した。

また国家はムフタシブと呼ばれる市場監督官を任命し、彼らを通じて都市市場での公正な取引、都市商業と手工業生産の秩序ある発展を支えようとした。

こうした国家の主導のもとに都市市場を自主管理したのが、都市商人と手工業者である。都市商人には、遠隔地商人と結びつく仲介商人―仲買人・代理販売人・委託販売人―、その仲介人から商品・情報を受けとり、販売に従事する各種の小売商人が存在した。

都市商人と手工業者は、国家によって指定された市場区に業種別の店舗をかまえ、そこから都市民に異境の産物を配分する役割を担ったのである。

不正取引・暴利の追求・抜け駆けなどによって都市市場がその機能を損なえば、国家はそこに直接介入して行く。それが帝国の本性だった。しかしそうした事態はできるかぎり回避しなければならなかった。都市商人・手工業者は、同職・同業集団を組織した。それによって礼拝・儀礼・慈善などにつとめつつ不正の防止、生産品の規格化、原料の安定確保、商品の共同仕入れ、販売の協同化など規律ある行動をつくりだし、都市市場の自主管理を志向したのである。

国家の主導と手工業者の自主管理の統一によって、都市市場は大きく進化した。これまでの年市・週市などの定期市は、商業都市の常設市場に組みこまれていく。そして都市内の常設市場は果物市場、衣料品・呉服市場、食料品市場、穀物市場、書籍・文具市場、奴隸市場、家畜市場、香辛料・薬物市場、金融・両替市場などの特定市場に分化していくのである。

この都市市場に異境の産物の購入者として参加したのが都市の庶民である。イスラム都市の住民は、旧住民と、都市の拡大とともに各地から集まった新住民から構成された。

都市の経済活動を担う商人、手工業者、建設技師、職人、大工、輸送・サーヴィス業者、移住者あるいは一時的定住者（遊牧民・流民・巡礼・旅行者・近郊農民など）、軍隊とその家族・親族、地方出身者、宗教および教育関係のウラマーなど、出身地・階層・集団構成・伝統文化をそれぞれ異にする人々の寄せ集めだった。彼らは、都市の産業・軍事・文化などの担い手でありつつ、この時代の異境の産物の享受者となったのである。

アッバース朝の最盛期、首都バグダードの人口は、推定一五〇万から二〇〇万を数えたという。<sup>(3)</sup> 帝国各地の都市人口を合わせたら、都市民の数はどれほどになるだろうか。その無数の人々が、境域・都市間市場に連動する都市市場を介して、異境の産物の豊かな配分にあずかったのである。

こうして西アジア・地中海は、八世紀半ばから一〇世紀半ばまでの二〇〇年のあいだにアッバース朝と呼ばれる巨大帝国を形成し、どこよりも大きく商業都市市場システムを進化させ、どの世界もおよばぬはなやかな商業文明 I をつくりあげたのである。

### 集中原理の限界

西アジア・地中海が新しい市場と文明を形成できたのは、この世界が集中原理によってアッバース朝イスラムという巨大中央集権国家（帝国）をつくりあげたからである。しかし強大な国家の力は、この地域における商業文明のさらなる進展——国民を単位とする異境の産物の豊かな配分——には寄与するものではなかった。もちろん帝国が商業とともに生み出した異境の産物は、都市からさらに農村へも広がった。旅商人、あるいは行商人たちが近郊の農



村部に向かうようになったり、農村のなかに薬種商・反物呉服商などの店舗が出現していくようになる。

しかし農民が享受できた異境の産物は、都市民と比べてほんのわずかであったといわねばならない。都市と農村とのあいだでは人々の生活に大きな格差が存在していたのである。それどころか帝国の勢いが下降線をたどるようになると、農村は都市に住む大商人、高級官吏、軍人たちの支配の対象にされていくのである。アッバース朝イスラムがその解決には向かうことはなかった。

都市民・農民を合わせた国民に異境の産物を豊かに配分するためには、商業都市市場よりもさらに大きく自由な全国的市場の形成に向かわねばならない。そのためには、国家管理をさらに後退させ、自主管理を大きく進展させねばならないが、西アジア・地中海のもつ集中原理が、それを許さないものである。

国家の主導と商工業者の自主管理の統一は持続しなかった。苦境に立つと、国家は市場に介入した。商人・手工業者がつくりあげた同職・同業組合に干渉し、彼らの生産・販売・価格を管理した。国家財政が悪化すれば、国家専売の貿易策を打ちだしたり、商人の財産を没収したりすることもしばしばだった。これでは、商工業者が新しい市場の可能性を拓こうとする意欲を育むことはできなかった。

国家はまた農民を縛りすぎた。彼らの行動を左右しすぎた。そのために農民がみずからの工夫と責任で農業を営み、みずからの所得と財産で生活を設計しようとする活力を蓄積することはできなかった。それゆえに西アジア・地中海は、都市と農村からなる全国的市場をつくり、国民を単位に異境の産物を豊かに配分する商業文明Ⅱまでにはいたらないのである。

このあとも西アジア・地中海は、あらたな国家・民族を登場させ、分裂・統合の興亡史を展開するが、結果はいずれもかわらない。

## 分裂と対立の時代

九世紀後半、イスラム圏内の西方と東方がバグダードに首都をおくアッバース朝から離れはじめ、カリフ政權に對して対決姿勢を強めていく。その主要な原因の一つは、都市と農村とのあいだに生じた大きな経済的・社会的格差、それがもとで起きたイスラム会派間の抗争であるが、これをきっかけにイスラム世界は分裂をはじめていくのである。

一〇世紀後半になると、イスラム世界にはそれぞれにカリフを自称する三つの王朝が鼎立する。バグダードを首都とするアッバース朝、カイロを中心とするファティマ朝（九〇九—一一七一年）、コルドバを首都とする後ウマイア朝（七五六—一〇三一年）である。

いずれの王朝も西アジア・地中海に統一をもたらすことはなかった。シリア・エジプトを本拠にしたファティマ朝は短命だった。その支配は、アイユーブ朝（一一六九—一二五〇年）に、さらにはマムルーク朝（一二五〇—一五一七年）にとつてかわられていくのである。

後ウマイア朝も長くはつづかなかった。その滅亡後イベリア半島は、ベルベル系をはじめとする無数の小王朝が乱立し抗争を繰り返す、めまぐるしい興亡の舞台になる。

バグダードを中心とする東方世界の分裂・対立はさらにはげしかった。ここには大規模な異民族集団の侵入が加わったからである。一一世紀にはトルコ族が、一三世紀にはモンゴル族がはいりこみ、それぞれが征服王朝を立てると同時にイスラム化して、イスラム継承国家となる。アラブ人・イラン人・ベルベル人によつて構成されたアッバース朝イスラムは、あらたにトルコ人・モンゴル人を加え、対決・分裂の度を深めていくのである。

西方、地中海ではあらたな混乱要因が加わる。西ヨーロッパ・キリスト教徒の国土回復運動（レコンキスタ）で

ある。一一世紀、イタリア・南フランス諸都市の地中海進出がはじまる。これによってアイユーブ朝・マムルーク朝イスラムは東地中海航行権を失い、シリア・パレスティナ海岸とナイル・デルタのみをその境域地帯として生きることになる。

イベリア半島も同じ運命をたどった。一三世紀には西ヨーロッパのレコンキスタがはじまり、一五世紀末にはこれは完全にキリスト教徒の手に落ちてしまうのである。

この分裂と対立の時代にあっても、商業文明Ⅰとそれを支える市場の形成は進められた。とりわけ一三世紀のモンゴル帝国とその末裔国家（四大ハーン国家）成立の影響は大きかった。巨大国家が広大なアジア内陸部を支配し、ユーラシア大陸を貫く幹線ルート、ステップ・ルートとオアシス・ルートをつくりあげ、それを維持したからである。

この中央アジア経由の陸の幹線ルートと、旧来のイラク・ペルシア湾を軸とするインド洋経由の海上ルートが結ばれ、陸海のアジア循環交通路ができあがった。これによって西アジアの東方では境域・都市間市場システムが進化し、異境の産物が大きく流通した。しかしそれがこの世界の市場と文明をつぎの段階へ向かわせる力になることはなかった。

### 統合の時代

西アジア・地中海はこのあと統合の時代に向かい、イスラム共同体を継承する二つの国家を出現させる。一つは、シーア派イスラム教を国教としたイラン系サファヴィー朝（一五〇一—一七三六年）である。サファヴィー朝はシャー（イランの伝統的帝王をあらわす称号・その称号を与えられた権力者）を頂点とする絶対専制国家をつく

りあげ、東はヘラート（アフガニスタン西北部）、西はバグダードにおよぶ帝国を形成する。いま一つは、アナトリア西北部に侯国を建設したオスマン・ペイを始祖とするトルコ系オスマン帝国（一二九九—一九二二年）である。

オスマン・トルコは、スルターン（スンナ派イスラム教世界の政治的権力をあらわす称号・その称号を与えられた世俗権力者）のもとに人々を結集させ、一四世紀ビザンツ領アナトリア、さらにはバルカン半島の征服を進める。一五世紀半ば（一四五三年）にはビザンツの首都コンスタンティノポリスを落とし、イスタンブルと改名しつつここを首都にする新しいイスラム継承国家を建設する。

一六世紀、オスマン・トルコはイスラム宗主国、マムルーク朝・アッバース朝を滅亡させ、それがもっていたカリフ権と領土を奪いとった。そしてスルターンにしてカリフである絶対的権力者を創出し、バルカン半島とアナトリアを本拠にシリア・エジプト・北アフリカを含み、クリミア半島からアルジェリアにおよぶ帝国を形成するのである。

サファヴィー朝・オスマン帝国はいずれも巨大帝国であったが、しかしそれ以前のイスラム国家とは性格を大きく異にした。これまでのイスラム国家がいずれも海洋に乗りだして異境世界との交流を大きくはかろうとしたのに対して、両帝国は海を国境とし、その交流舞台を内陸世界に閉じこめる内陸型国家への道を歩むのである。もちろん両帝国において商業都市市場の形成は進み、帝国間では通商が、帝国内では流通が盛んになった。しかしそれはあくまでも都市民に異境の産物を配分するためのものだった。

サファヴィー朝は一八世紀まで存続する。しかし一七世紀前半にはすでに衰亡期にはいる。オスマン帝国は二〇世紀まで生きのびるが、一六世紀後半にはすでに下降線をたどっていく。西アジア・地中海は、商業文明Ⅰを極限

まで進化させる道を選択したのである。そして商業文明Ⅰのまま一九世紀まで推移し、第三の文明となる産業文明をさきに形成した西ヨーロッパ列強・ロシアの進出・侵略を受ける運命をもつのである。

## 二節 中国世界

中国世界における商業文明Ⅰの形成もまた、巨大な統一的中央集権国家（帝国）の形成によって行なわれる。しかし西アジア・地中海とはつぎの点で違っていた。西アジア・地中海がその世界を大きく拡げ、新しい国家・民族を登場させることによって市場と文明を進化させたのに対して、中国世界はこれまでとはほぼ同じ地域を舞台に、漢民族を主役とその政権を交代させることによって市場と文明を形成したことである。

もちろん厳密にいえば、漢民族の力だけで商業文明Ⅰが形成できたわけではない。中国世界には非漢民族による征服王朝ができ、異民族のエネルギーがそこに加わるからである。しかし征服王朝は、かぎりなく漢民族化し、中国王朝の継承者となって市場と文明の形成に参加した。その意味で中国世界は、異民族の血・文化をとりいれつつも、かぎりなく漢民族を中心に商業帝国を形成し、商業文明Ⅰの可能性を拓くのである。

### 1 唐後期・五代十国期

#### イスラムとの交易

中国世界が最初につくりあげる商業帝国は、宋である。その宋が出現するまえの、唐の後半期（八世紀半ば—九〇七年）とそのあとにつづく分裂の五代十国期（九〇七—九五九年）から物語をはじめよう。中国における商業文明Ⅰ、それを支える商業都市市場づくりは、この約二〇〇年のあいだに準備されているからである。

すでにふれたように、唐はその後期にはいる八世紀後半、政治都市市場を急激に進化させることになる。その大きなきっかけの一つは、商業帝国アッバース朝イスラムとのあいだで繰りひろげられた海上交易である。<sup>(4)</sup>

西アジア・地中海と中国世界とのあいだにはアラビア海・インド洋・南シナ海がおかれている。これらの海洋は、はるかな昔からアラブ系・イラン系・インド系・マライ系などの海上民によって海の道として拓かれてきたが、まだほそぼそとしていた。それが、七世紀末から八世紀はじめには、イスラム帝国の手によって一本の太い海上貿易路に仕立てられたのである。

唐はこの海上路を使ってイスラム帝国（その商人）と交易を展開した。その基地になったのが、広州・温州・杭州・揚州などの港湾諸都市だった。諸都市には、ペルシア湾の諸港を本拠とするアラブ系・イラン系の航海者や商人が進出していた。

唐は彼らの手を借りて、バグダードをネットワーク・センターとする西アジア・地中海市場に向けて絹織物・錦織・陶磁器・漆器・青銅容器・銅銭・紙・墨・鏡など中国産の商品を送りだし、その対価として西アジア産のガラス・陶器・木綿・亜麻布・毛織物、南アラビア産の乳香・没薬・龍涎香、東アフリカ海岸産の象牙・犀角・動物皮革、ペルシア湾産の真珠、地中海産の珊瑚、スリランカ・インド・マラバール海岸の胡椒・肉桂・宝石類、アッサム産の沈香などを輸入した。

中国の港湾諸都市はまた、西アジア・地中海市場に向かう東南アジア産の熱帯香辛料・薬物類が集荷する境域市場でもあった。マライ系・インド系、あるいはアラブ系・イラン系の海上商人によってここに集荷された商品の一部が、中国各地の政治都市市場に向けて送りだされたはずである。

海上ルートを使ったイスラムとの交易は、これまでの陸のオアシス・ルートやステップ・ルートの交易とは、比

べものにならないくらい多種多量の異境の産物を中国世界にもたらしした。

### 商業文明Ⅰの萌芽

異域の商品の流入は、国内各地の諸産業の発展を促した。それとともに茶・砂糖などさまざまな特産物が政治都市市場のネットワークのなかを流通することになった。これまで異境の産物の豊かな配分にあずかれたのは、支配階層だけだった。庶民にとっては、それは夢の夢だった。それが実現される夢に近づいたのである。

農民がこの夢を実現しようとすれば、それはやはり政治都市市場への参加によるしかなかった。彼らは所得・資産をふやすために、みずからの知恵と危険負担で農耕の市場型経営をはじめるのである。やがて小農民のなかから、大きな土地を保有する庶民地主層が登場し、小作人を使う大土地所有経営が出現していくのである。

唐の前期、華北の畑作農法、アワ作・コムギ作は大きく発展した。しかしまだアワとコムギは別々の圃場で育成され、それぞれ一年一毛作のかたちで栽培されていた。唐後期の農耕の市場化は、その畑作形態を大きく変化させ、アワとコムギを同一圃場で栽培すると同時に、それを二年三毛作にする新しい農法を生みだすのである。そしてコムギのウエートを高め、それを主穀にしようとするのである。

市場型農耕経営はこれまでの均質な生活基盤を崩し、社会階層の分化をつくりだした。九世紀はじめ、国家もまたこの動きに対応する政策を打ちだした。

すでに商工業者に対してはその資産に応じた金納課税を実施していたが、唐はこの方式を農民に対しても適用していくのである。これまで唐の税制は丁男ていなんを中心とする個別単位の均等負課・現物納を基本としていた。それを戸単位の資産別負課・貨幣納に切りかえていくのである。資産のある家（自作農・小作農）と資産のない家（隸農・

莊客・田客などと呼ばれた」とを區別し、前者に対してはその保有面積に応じた税額を定めると同時に、税金を金納にし、しかもそれを年二回（夏と秋）徴税するシステム——両税法——を選択していくのである。

それとともに辺境防衛の兵制もかえた。均等負課を前提にした徴兵制をやめ、報酬をターゲットとする募兵制を採用していくのである（両税法的税体系・募兵制はこれ以後の諸王朝に受けつがれ、明王朝までつづく）。

これは、社会間・社会内に市場の可能性を大きく拓き、大地の恵みに加えて、さらに異境の産物の豊かな配分をめざすつぎの文明への動きだった。中国世界は、唐という農耕社会のなかに、商業文明Ⅰのはじまりを準備していたのである。

唐王朝は政治都市市場を商業都市市場に切りかえ、その文明を農耕文明Ⅱから商業文明Ⅰへと変換しようとした。しかしそれはこの王朝にとっては重すぎる課題だった。唐は、農耕文明の形成をめざしてつくられた律令国家だったからである。後半期に大きく変質したとはいえ、最後まで農耕社会としての骨格・体質を脱することはなかった。その律令的骨格・体質と、あらたに加わった商業的要素とがはげしくぶつかっていくのである。

### 矛盾と反乱

唐は、市場の急激な進化がつくりだした社会の変化に対応するために、律令制にない支配機構、いわゆる令外の官をつぎつぎと新設した。令外官の候補となつたのは、この時期に新勢力として登場をはじめた庶民地主層である。国家は彼らを科挙制度によって吸いあげ、あらたな支配機構を準備した。そうしながら唐朝は従来の貴族・豪族からなる律令官職を廃止しようとはしなかった。新旧の支配機構の併存はしだいにはげしい対立と抗争を生みだしていくのである。



支配層のあいだの対立・抗争と相互作用するように、庶民層のあいだにも衝突が生じた。市場化の恩恵は、すべての庶民に公平ではなかったからである。成功して富商・庶民地主・官僚になる者も出たが、同時に破産する者も数多くあらわれた。破産者は大商人の使用人、庶民地主の小作人・隷属農民に、さらには唐代につくられた防衛体制——藩鎮——の傭兵になった。他郷へ逃亡する者——逃戸——、遊民化し、盗賊や無頼の徒になる者さえあらわれた。

分化した階層間の利害が一致することはなかった。政争に明けくれる支配層に、それを調整する術のあろうはずもない。九世紀半ばを過ぎた唐末になると、市場の進化に適応できなかった人々の不満は一気に高まった。その圧縮度が高く、最初に反乱を引き起こしたのは江南である。

反乱はまず、江南の藩鎮に属する兵士が中央から天下つてくる長官、節度使を追放しようとして起きた「康全泰の乱」からはじまった。やがて反乱は北上を開始し、浙東を舞台に、没落した小農民・貧農、山賊・海賊などの無頼の徒が結集し、州政府、それに味方した地主・大商人に対して起こした「裘甫の乱」、江淮を舞台に、藩鎮兵士と農民が結び、唐朝に敵対した「龐勛の乱」などに発展した。

江南から江淮へ達した反乱はさらに華北におよんだ。「黄巢の大乱（八七五—八八四年）」である。黄河下流域を舞台に、連年の凶作でもって群盗化した下層農民・破産農民の蜂起が引き起こしたこの反乱は、黄河と長江にはさまれた地域に南下し、ついに華北・江南全体におよぶ大乱となった。

### 武人政権

大乱は中央政府の機能を麻痺させた。それにかわる新しい支配勢力として台頭してくるのが、各地の藩鎮である。これまで藩鎮は、唐朝によって派遣された貴族官僚が管理する中央機構の一環だったが、それが反乱鎮圧のな

かで権力を握った武人節度使に支配されつつ、中央から自立する存在になった。

やがてこの武人藩鎮同士の対立・統合が起こり、それをもとに複数の王国が形成された。唐の帝権はその一つ、後梁に譲りわたされた。九〇七年のことである。このとき三〇〇年近くつづき、農耕文明Ⅱづくりによって東アジア世界の形成に大きな影響を与えた唐王朝は滅亡してしまふ。

このあと中国世界は五〇年におよぶ分裂の時代、五代十国期にはいるが、商業文明Ⅰ形成の準備はその時代に進展することになる。

唐の滅亡後、華北には開封・洛陽を中心<sup>かいほう</sup>に、後梁にはじまり後周におわる五つの王朝がめまぐるしく興亡を繰り返した。五王朝の支配領域はいずれも黄河中流域の中原にかぎられ、それ以外の地域には前蜀・後蜀・呉・南唐など、ほぼ十の王国が割拠した。その時代が五代十国期である。

五代十国期の王朝・王国の支配者はいずれも武人節度使の出身だった。彼らは軍事を中心に民政・財政の権力を握ることによって、強力な地方勢力となった。そのなかでもっとも大きな勢力をたくわえた者が、主君を倒して新王朝や新王国を建設したのである。

五代十国の支配者たちは混乱をおさめるべく節度使体制を中央にとりいれ、その強力な軍事力を背景に新しい秩序づくりをめざした。

#### 私貿易・商業都市市場・農業の育成

第一は遠隔地貿易の促進である。

唐滅亡後、東アジアと南海の交易（貿易）圏はその様相を大きく変貌させた。中央集権国家の消滅によってこの

世界における政治的規制力が著しく弱まり、私的な貿易商人たちが登場をはじめたのである。

華南の港湾都市は、イスラム商人だけではなく、そこから南海の各地に向かう中国私商人たちの出航地となった。また揚州・淮安をはじめ黄海に接する東部の港湾都市は、日本列島の博多（太宰府）や朝鮮半島の新羅とのあいだを行き来する中国や新羅の私商人たちの貿易拠点となった。

五代十国の支配者たちは、これらの拠点に進出して私貿易に参加する商人たちをバックアップし、やがて本格的にはじまることになる遠隔地貿易の基礎づくりに貢献したのである。

第二は商業都市市場づくりである。

五代十国の武人政権は、私貿易に結びつき、それがもたらす異境の産物を流通させることのできる都市市場を形成しようとした。彼らは商工業（者）を育て、これまでの政治都市市場を商業都市市場につくりかえようとしたのである。

第三は農業の育成である。

五代十国の武人支配者たちは商業都市市場をターゲットに生産をする市場型農耕、農業づくりを競いあつた。支配者たちは、大土地を集積し、管理人と多数の小作人―佃戸―を使う組織的農業経営体―荘園―と、それを経営する新興の庶民地主層―形勢戸―を育てた。庶民地主はすでに唐の後半期に均田農民のあいだに生じた階層分化とともに出現していたが、それがこの五代十国の分裂期に、武人政権のバックアップのもとに大きな勢力となった。市場生産をめざす新興地主層の出現によって、江南の農耕は農業に変身していくのである。

江南では、圩田・井田・湖田などと呼ばれる水利田の造成が進展した。南京付近の氾濫原では大規模な堤防がつくられ、その内側が稻田にかえられていった。また蘇州に接する太湖から長江下流域にかけては、クリークの建設

によって低湿地帯が広大な水田にかわりはじめた。

水利田の造成は、新しい水稻栽培技術・農具を生んだ。クリーク周辺の泥土をさらって耕田に施入する客土法、苗代を使った移植法、正条植え、施肥・除草といった稲作技術体系がつけられると同時に、灌排水用の足踏み水車——龍骨車<sup>りゅうこつしや</sup>——が誕生した。これとともに稲の品質もまた早稲<sup>わせ</sup>・中稲<sup>なかて</sup>・晩稲<sup>おくて</sup>というふうにより多様化しはじめたのである。

私貿易の発展、商工業を中心とする都市市場の形成、市場型農業の出現は、まもなく中国世界に訪れる商業社会形成の大きな下地になるのだが、それが唐崩壊後の、五〇年にわたる分裂の武人政権時代に準備されたのである。

## 2 宋帝国

### 対等国の出現

こうして各地に分散して進められた市場づくりを、一つの国家のなかに統合して商業文明Ⅰを形成し、中国世界に最初の商業国家をつくりあげるのが宋である。

宋朝は二つの時代に分けられる。華北を本拠にした北宋時代（九六〇—一二二七年）と、江南に本拠を移した南宋時代（一二二七—一二七九年）である。

宋の版図は北宋時代も南宋時代も、歴代のどの王朝のそれよりも小さく、勢力もまた弱かった。宋朝が太祖（在位九六〇—九七六年）、太宗（在位九七六—九九七年）の二代をかけて諸国を平定し、中国の統一をなすとげたときにはすでに周辺諸民族が大きな力をたくわえていたからである。

唐代、周辺諸民族はまだ貧しく、唐帝国の圧倒的な支配のなかで生きた。しかし彼らは唐の文明下で力をつけ、

唐宋・五代十国期にはその混乱に乗じて中国世界に領土を拡げていたのである。そのなかでもとりわけ大きな勢力を誇っていたのが、中国東北地方に国を立てた遼（大遼）と西北地帯の西夏（大夏）である。

遼は、東モンゴルの契丹族が立てた国家である。北方の草原地帯を本拠にする遊牧国家であったが、同時に南方の華北農耕地帯を領有し、その直轄支配をめざす二重支配国家だった。彼らは五代十国期に、現在の北京・大同を中心とする燕雲一六州を支配下においていた。その遼が、宋の建国後さらに領土を拡大しようとして開封に迫ったのである。

宋は、侵入を食いとめるだけの力がなく、国土を保全するために、遼に歳幣（金品）を送らねばならなかった。それは中国の立場の大きな変化を意味した。

これまで中国を代表する王朝はどれも、周辺諸国をつねに藩王国・朝貢国として扱った。ところが宋は、遼を対等国として扱わねばならなかった。中国の長い伝統がここにおいて崩れたのである。

西夏は、チベット系タングート族が立てた国家である。西夏もまた唐宋・五代十国期に中国の西北部、つまりオルドス南部の夏州（現在の甘肅・寧夏に相当する地方）に勢力を拡げた。宋の統一後は河西回廊に向かい、その内陸東西貿易路を支配しつつ宋の国境内に侵入し、陝西方面を脅かした。宋は国境をまもるために、西夏に歳賜（財物）を与えねばならなかったのである。

それだけではなかった。宋の国土をさらに大きく奪う強力な民族が登場する。一二世紀初頭（一一一五年）中国東北部に出現した金である。金の前身は東北部の地帯に広がり、狩猟・農耕の生活を送っていたツングース系の女真（ヂウルチン）族である。彼らは遼の支配下で成長をとげ、その遼を倒した。

金王朝は遼にとってかわるだけでは満足しなかった。金は南下して宋の国都林京（開封）を占領し（靖康の変・

一一二六—一二二七年)、太祖以来一六七年つづいた宋を倒してしまふのである。

これは完全な滅亡とはならなかった。宋は、江南を本拠にあらたな国を建設する。それが杭州(行在臨安府)を国都とする南宋である。

金はその南宋にも迫った。開封を中心に、淮河・大散関以北の華北の広大な農耕地帯を領有した。淮河と大散関を結ぶ線は、中国本土をほぼ南北に折半する。宋はその領土を半分失なったのである。そしてこれまでもと逆に、金を君としてみずからを臣下とする、金の冊封体制に組みいれられ、しかも金に歳貢を払いつづけねばならなくなったのである。

### 商業都市づくり

こうした状況のなかで宋朝が生存し、発展していくためには、唐後期・五代十国期に準備された下地をもとに商業国家を建設していくしかなかった。西アジア・地中海は、すでにそれに向かって動いていた。宋はそれに倣って、都市庶民に異境の産物の豊かな配分をしていく商業文明Ⅰの形成に向かっていくのである。

新しい文明を形成するためには、それにふさわしい国家システムをつくらねばならなかった。宋朝は、武人体制を廃した。これまでの節度使体制を解体し、節度使が握っていた軍政・民政・財政の権限を奪い、その権限を文官を中心とした中央官僚システムに集中させ、それを皇帝が支配することによって国家を統一する、強力な専制体制の確立をめざした。

宋朝は、その文官官僚システムを新文明を志向する人々によって編成しようとした。ターゲットとしたのは、新興の大商工業者と庶民地主層(形勢戸)である。宋はその子弟のなかから優れた人材を科擧システムによって選抜

し、中央官僚体制に組み入れた。それによって人々を結集させ、商業文明Ⅰを支える商業都市市場（境域市場・都市間市場・都市市場）の形成に向かおうとしたのである。

そのためには、母体となる商業都市づくりが欠かせない。宋は国力をあげて、都市の拡充・建設を推進した。古くから政治的機能をもってきた大都市（けいふ京府）や、各地方（州・県）の行政の中心となる中小都市を大きく整備し、商業や手工業で成りたつ都市に仕上げたのである。

中国の都市は城壁をもつのが伝統だった。宋は都市の発展に合わせて、旧城（内城）の周囲に新城（外城）をつくった。北宋の主要都市だった東京開封府・南京なんぎん応天府は、三重の城壁をもつ都市になった。この時代府・州の都市では、人々の暮らしは城壁を越えてその外部に大きく広がったが、宋政府はそこに広がった居住区をあらたな都市空間として把握し、それと城内の行政を一体化させる都市をつくりだした。

宋王朝は、あらたな都市の創出にも主導力を発揮した。すでに述べたように唐の時代に、州・県治ちの法で定められた正式の市場、市しとならんで、各地の小都会や村落には法制の適用範囲外におかれた市場、草市そうしが誕生していた。その草市が唐末・五代十国期から宋代にかけて数をますと同時に、それが核となり小都市をかたちづくっていた。それらは、鎮ちんあるいは市しと呼ばれ、地方制度の単位を構成していた。宋政府はそのなかから、交通の要衝を占め、商工業の盛んな鎮・市を選びだし、これを地方の商業都市に育てあげたのである。

### 国境貿易

宋朝は、こうした府・州・県を代表する大・中都市を中核に、全国各地の小地方都市群を加えた巨大な都市間ネットワークを創出しながら、周辺の世界、遠隔の地とのあいだに境域市場をつくり、国際貿易に積極的に乗りだ

すのである。

宋はその北辺に位置した諸国とはげしい戦闘状態や緊張関係をもったが、それにもかかわらず彼らとのあいだに能動的な対外貿易を展開した。北宋は中国の北東・北西に位置する遼・西夏との国境に官営の貿易センター―権場―を設置して、国家みずから参入したり、商人をコントロールしたりするかたちで両国との国境貿易に乗りだした。

国境を舞台にした権場貿易を盛んにしたのは、南宋である。貿易の相手は金であった。両国がそれぞれ、国境線にそう要地に権場を開設した。南宋は商人を大と小に分け、大商は中国側の権場で金の商人の来訪を受ける、小商は金の権場に直接出向くというかたちにして取引を行なった。

いずれの場合も、商人間の直接取引は許されなかった。南宋は金との国家間協定によって貿易価格を定め、仲介人―牙人―においてそれを遂行した。これによって密貿易・脱税・禁制品の輸出を防止しながら、北方の異境の産物の豊かな確保をめざしたのである。

南宋は、金に対して茶・象牙・犀角・香薬・薬材、両浙・四川産絹織物・漆器・竹木器・筆墨・錢・米などを輸出し、金から北珠、貂皮、人參、甘草などの薬物、河北・京東（金国領土）産の高級絹織物などを輸入した。<sup>(5)</sup> 両国の国境貿易は宋の輸出超過、金の輸入超過であった。宋は、その超過分を銀で受けとったのである。

### 海上貿易

宋が大きな力をいれてとりくんだのは、海路を舞台にした外国貿易であった。唐滅亡後その国際政治力の弱まりとともに、南海・東アジアには私的な貿易商人による国際市場づくり、それを舞台にした私貿易が展開をはじめて



いたが、宋国家はそれを活用して遠隔地貿易に乗りだしたのである。

その一つが、南シナ海に面した広州（北宋代）、泉州（南宋代）を基地にする南海貿易である。

唐以来、南海貿易で主役を演じたのはイスラム商人だった。宋は盛時に、さらに多くのイスラム商人を受け入れた。広州・泉州には、イスラム商人のための居住区もつくった。しかしそれだけでは満足しなかった。宋朝は無数の中国商人をインドシナからインドネシア、さらにはインドの南部にまで送りだしたのである。

宋の海商のなかには、ヴェトナムからチャンパ（南ベトナム）・カンボジアにいたるインドシナ半島の主要部をはじめとして、東南アジア各地の首都や港湾都市に集団で進出・定住して商業活動に従事する者も多数出現した。のちに華僑と呼ばれることになる人々の源流である。

いま一つが、東部の黄海に面した寧波（ニンポ・ねいは・明州）めいしゅうを基地にする東アジア貿易である。

国家は宋の私商たちを朝鮮半島・日本列島にも送りだした。この時期、朝鮮では新羅にかわって高麗が王朝を立てていた。高麗政府の積極的な招来策に応じて、数多くの宋商が朝鮮半島を訪れたのである。

宋の私商が日本列島をたずねたとき、日本はすでに平安末期にさしかかっていた。このとき日本の対外交渉の窓口は太宰府であったが、宋の商人は、博多以外に平戸・坊津・敦賀にも向かった。なかには、それらの地に居住する者もあらわれた。後述することになる荘園制が発展した時代で、中央貴族を含めた荘園領主たちが対外貿易の利益をばげしく求めていたからである。

一二世紀の半ばすぎにできた平氏の政権時代には、宋日貿易はさらに盛んになった。兵庫港が築かれ、瀬戸内海航路が整備され、日本の商人も対馬・高麗を経由して、宋におもむくようになった。

こうした内外の私的商人の手によって、中国からは各種の絹織物、陶磁器、鉄・銅器、漆器類などが送りだされ

た。そしてそれと引きかえに、南海からは象牙・犀角・真珠・珊瑚・香料・薬材などが運びこまれた。また宋からは絹織物・陶磁器のほかに、香料・薬材・茶・書籍・文房具・銅銭（禁制品だった一時期を除き）が朝鮮半島・日本列島に送られ、高麗からは人參などの薬物、土産の食品が、日本からは砂金・水銀・硫黄・木材などの第一次産品、蒔絵・扇子・刀剣などの手工芸品が輸入された（硫黄は当時中国で開発された火薬の原料となった）。

物資の流通だけではなく、技術も交流した。宋は、火薬・羅針盤・印刷術を各地に伝えると同時に、その末期にはインドから木綿の栽培を受け入れた。（木綿は中国において衣料革命を引き起こし、これまでの麻の衣料にとつてかわることになる。木綿の技術が最初に根をおろしたのは長江下流域だったが、明代には中国全土に広がる。この技術は高麗末期に朝鮮に、一五世紀前後に日本へ伝えられることになる。）

### 手工業・農業の発展

宋朝は私的商人による国際貿易を背後から支えた。外国使節・商船の招来を積極的に進め、宋朝の使節や商人たちを優遇した。またことあるたびに自国の使節を海外に派遣したり、貿易商人に国書を託したりして、諸外国の朝貢・通商を勧誘した。それは宋朝歴代のかわることのない対外方針となった。

そうした支援策をとりつつ、宋朝は私貿易をコントロールした。宋は（そしてのちの元も）、南海・黄海沿岸の重要な海港に、市舶司もしくは司舶務という官衙をおいて商人の活動を統制したのである。

中国からの出航はすべて許可制で、商船には公憑・公驗・公掟などと呼ばれる許可書を与えた。入港する内外の商船からは、抽分と呼ばれるほぼ十分の一に相当する関税を徴収した。

真珠・たいまい・犀角・象牙などの貴重品は、政府の専売品―禁権品―とし、市舶司に専買する権利をもたせ

た。またそのほかの商品についても、政府はその一部分を先買―博買―<sup>はくばい</sup>する権利をもち、それを市舶司に実行させたのである。

宋はこうした国家の支援・管理をベースに、そこに多くの私的商人たちを参加させた官民一体の遠隔地貿易によって、さまざまな異境の産物・情報・技術を国内の境域・都市間市場のネットワークに流入させたのである。

こうした異境の産物の流入と相互作用するかたちで国内の諸産業が発達した。とりわけ躍進したのは、絹織物・陶磁器などの手工業である。

絹織物は、古代にあつては華北の東部産、西の四川産が知られていた。宋代にはそれらの生産量が拡大すると同時に、高級化が進行した。そして北の河北・山東、南の浙江・江東があらたに高級絹織物産地として知られるようになった。

北宋時代、陶磁器産業の中心は華北にあつたが、そこを金に占領された南宋時代になると、その重心は南（景德鎮・龍泉）に移った。江南の製陶産地では、青磁・白磁の高級品とならんで、大量の日用陶器が生産された。

そのほかに、この時代の印刷術の発達にもなつて、各地で製紙業・書籍出版業が盛んになった。

農業もまた大きく進展した。著しかつたのは江南である。ここの主要作物は米だったが、それとならんで麦（大麦・小麦）もまたつくられるようになった。表作の米と裏作の麦とを組みあわせた一年二毛作が普及した。また早稲と晩稲を組みあわせた一年二期作も見られるようになった。

油類・砂糖・茶など、商品作物の生産も盛んになった。とくに散茶（葉茶）・片茶（抹茶）に二分される茶は、北方遊牧民相手の重要輸出品として、また庶民の大衆的飲料として大量に生産されるようになったのである。

## 市制の変革

中国各地で生産された手工業製品・農作物のうち、その一部は貿易商人の手によって、その背後にある国家の手を通して国際市場に送られていくことになるのだが、大半は中国国内の境域・都市間市場のネットワークを経由して、各地の都市市場に分散されたのである。

都市市場の形成に、大きな役割を演じたのもまた国家だった。宋は、都市市場に対する管理の手をゆるめる政策をとったのである。

すでに述べたように秦・漢から唐にいたるまで、中国の都市市場はきびしい統制のもとにおかれた。市場（区域）は都市内部の一区画、市に限定され、市の周囲には市墻がめぐらされ、市門が四方に設けられていた。営業時間が定められていて、時間外には市門は閉ざされた。夜間営業が行なわれることはなかった。

このような「市」制は唐の中期ごろからしだいにゆるみはじめていたが、北宋はそれを一段と進行させ、市場の組織・運営を関係者の自主管理にゆだねるようになったのである。商人たちがみずからをきびしく律するかぎり、街頭に進出したり、大街に店を開いたりすることを許すようになったのである。

南宋の時代になると、自主管理の範囲はさらに広げられた。国家は、商工業者が都市のいたるところに店を開くことを許可した。夜間営業の禁をとき、昼夜を通した営業を認可するようになった。そして市場外に、小市場としての草市の開催を容認していったのである。

それだけではなかった。国家は草市から発展した鎮・市などの新小都市における市場の開催を進め、あらたな商店街や手工業区を創出したのである。国家は定期市の進展にも大きな役割を果たした。場所・時間の制約をなくし、州・県治の比較的大きな都市だけでなく、鎮・市などの小都市や農村においても、市集・会集・墟・虚・墟

市・虚市などという名で呼ばれる定期市をひんばんに開催させていくのである。

### 商業文明Ⅰの実現

こうして都市市場は商業都市全体に、さらにはその周辺に大きく拡大されていく。それとともに商人・手工業者の組織、「行」・「作」の機能が変化していくのである。

唐代まで、国家は特定地域内（市）の一区画に同業商店を集住させ、一括してコントロールした。この国家管理の同業商店街区、ならびに国家の支配のなかで共同の利益をまもうとした同業商人組合が「行」、同業手工業者組織が「作」である。

それが自主管理される市場の広がりとともに、自主規制された同業商店街区、ならびにセルフコントロールしつつ共同の営利を追求する同業商人組合、同業手工業者組織にかわっていくのである。

自主管理によって営利を追求する商工業の出現によって、境域・都市間市場のネットワークが強化され、そこを通って運ばれる異境の産物が、都市庶民の暮らしのなかに豊かにはいりこんでいくのである。

もちろんこれによって、都市市場が国家の手を離れて自立することはなかった。市場は、その大きな部分が行政と結びついていたからである。都市市場は、国家が租税として集めた品物の流通や、国家が運営する各種の専売事業を支える制度でもあった。

また宋代には、軍隊の食糧をまかなうために庶民から米・小麦などを買うあげの制度「和糶」<sup>わてき</sup>、あるいは軍衣を調達するために人々から織物を買うあげの制度「和買」<sup>わばい</sup>があったが、都市市場はそれらを支えるためのものでもあった。そして商工業者、その団体である行・作もまた、国家の行政的な物資調達の請負機関としての側面を強く

もっていたのである。

宋は、こうした国家と私的商工業者との共同作業によって、大きくて自由な境域・都市間・都市市場システムをつくりだした。それは、農耕文明時代の政治都市市場のネットワークよりもはるかに規模が大きく、自由度が高かった。宋はそうした商業都市市場世界を拡大・深化させることによって、中国における商業文明Ⅰをつくりあげたのである。

中国における商業文明Ⅰの形成は、宋代だけでおわらなかった。宋を壊滅させ、中国の新しい王朝となる元（一二七九—一三六八年）に引きつがれるのである。

### 3 元帝国

#### モンゴル帝国

元は、遊牧民モンゴル族がつくった帝国の東の一部が本体から分立し、漢民族を支配するかたちで形成された征服王朝である。

唐末から宋代にかけて、すでに周辺には漢民族と対等の、あるいはそれを圧迫するような勢力が誕生し、中国の北に大きくはいりこんで国を立てていた。すでに述べた遼・西夏・金がそうである。元は、それよりもさらに巨大な塞外勢力で、中国の北半分、華北だけでなく江南の地をも支配し、中国全体を直接支配する王朝となるのである。

元朝のもとになったのは、モンゴル草原の中央部、オノン川とケルレン川の水源地方をその故地とした遊牧部族、モンゴル（部）である。

北緯四五度線を中軸にアジアの北東から南西にむけて走るステップ地帯を生業の舞台とする遊牧民と、その南に位置する農耕・商業地帯に生きる定住民とのあいだには、生活様式の違いによる衝突がなん度となく繰り返された。定住民の勢力が圧倒するときには草原の農耕地化が進み、逆の場合には遊牧民による農耕地支配が行なわれる。

モンゴル族ははじめ、定住民遼・金の支配のもとに雌伏の時代を生きた。しかし苦難の時代がおわり、その立場を逆転させるときがやってくる。一二世紀後半、初代ハーンとなるテムジン（チンギス・一二六七—一二二七年）が彼らを率いて遠征を開始したときである。

モンゴル族はモンゴル草原・キルギス草原からなる北方アジア遊牧世界を制覇したあと、南方の定住民世界の支配に向かい、二代のうちにアジア大陸の大半を版図にいれる巨大帝国を建設した。モンゴル帝国である。

帝国形成の過程で、モンゴルは東西二地域の支配をめざした。西はすでに語られたアッバース朝末期のイスラム世界である。東は南宋末期の中国世界である。東アジアの支配をめざしたモンゴルは、まず西夏を滅亡させ（一二二七年）、金王朝を地上から消し去った（一二三四年）。これによって中国の北半分は、モンゴルの支配下にはいるのである。

モンゴル帝国の寿命は短かった。一三世紀中葉、チンギス・ハーンの孫の世代に、帝国はその領土の広大さ、その内容の複雑さゆえに大分裂をはじめていく。分裂してできた末裔国家は、いずれも先祖がえりをし、西の分身はイスラム化し、その継承国となる。東の分身は中国化し、元となって中国歴代王朝の継承者となるのである。

モンゴルとその末裔の支配は、東西二つの世界の商業文明化に大きな作用をおよぼした。しかし両者に与えた効果を比較した場合、イスラム世界が受けたそれは、それほどではなかったように思われる。イスラムは、アッバー

ス朝の盛期に商業文明Ⅰをほぼ達成していたからである。それに対して、中国世界が受けた影響ははかりしなかった。中国は商業文明Ⅰ形成の途上にあったからである。

### 征服王朝

元の創設者はチンギス・ハーンから数えて三代目、モンゴル帝国ハーンの位をもつフビライ（在位一二六〇—一二九四年）である。彼は最初モンゴル帝国の「漠南漠地大総督」として、かつて金が国を立てていた華北の支配にあたった。現在の北京に新都、大都大興府を建設し、金王朝の体制を踏襲しつつ国号を元と称することになる。

モンゴル帝国の亀裂が進むなか、フビライは第五代ハーンの位につくが、帝国から分立し、中国へ傾斜していく。やがて彼はその勢力を南下させ、南宋を消滅させる（一二七九年）。これによって、中国世界全域が元の支配下にはいることになるのである。

フビライはモンゴリアの支配をめざしつつ、同時に中国の支配者となる道を選択した。モンゴルの文化を保持しつつ、それと中国の文化を合体させた新しい征服王朝の建設をめざしたのである。こうして中国世界にフビライを始祖とする征服王朝が生まれていくのだが、中国全域が塞外異民族の支配下にはいったのは、このときがはじめてである。

フビライの死後、モンゴル帝国は完全に分裂する。このときにはすでに帝国の東領だった元は、完全に中国そのものになってしまっているのである。

元はここに中国とまったく別の支配王朝を立てようとはしなかった。彼らは、中国世界の伝統にしたがい、天命によるというかたちをとって宋から中国の支配権を受けつぎ、中国王朝の一つとして生きる道を選んだのである。



しかし元朝は、数でいえば少数の遊牧民が百倍に余る中国人を統治しようとする異民族王朝だった。朝廷とそれにつきしたがって中国内地に移動したモンゴル人だけで支配体制を編成することはできなかった。元朝は、モンゴル朝の伝統を受けつぎ、西方系に属する西域人——彼らは一括して色目人しきもくじんと呼ばれた——をモンゴルに準ずるものとして、その統治体制のなかに組み入れた。

征服王朝は最初から、その支配体制に不安定要素をかかえていた。その一つが被征服民、とりわけ江南人の恨みである。元は金国の領地となっていた漢地、華北と、南宋の領土となっていた江南を支配下においたが、両者を統一支配しなかった。圧倒的な人口と豊かな経済的実力を備えた江南を警戒し、南北を分断して北を優遇する統治方式をとったのである。

元は、その直轄地を河北・山西・山東の地から動かさなかった。首都もまた大都から動かすことはなかった。そして金国の遺民と南宋の遺民をそれぞれ漢人、南人に区別し、支配者層の採用から日々の暮らしにいたるまで、前者を後者に優越させる統治方式を選択したのである。この分断統治は、江南の南人のあいだに大きな不満を蓄積させることになる。

いま一つの不安定要素は、元朝がモンゴリアと中国の二つの世界を統治する征服王朝だったことである。元朝はしだいに支配の中心をモンゴリアから漢地に移していくことになるが、それにつれてモンゴリアに残ったモンゴル世家と、漢地に移っていった同族とのあいだの格差は広がる一方だった。この格差が新しい皇帝の擁立にさいして、深刻な権力闘争を引き起こさずにはいかなかった。

そうした要因から元朝の寿命は短い。わずか九〇年である。

## アジア循環ルート

しかし元朝という異民族王朝の出現は、中国世界における商業文明の進化にとりわけ大きな役割を演ずることになる。それは、彼らがユーラシア大陸の陸・海を舞台にする巨大な遠隔地貿易市場を創造したからである。

すでに宋の時代に海のシルク・ロード、南海貿易路が大きく拓かれ、宋は私的商人たちを使つて南海貿易に乗りだしていた。元もまた南宋の併合後、それに大きく参画した。この元朝の南海貿易に主導的役割を演じたのは、江南臨海地帯居留のアラブ系商人だった。彼らが受け入れられたのは、元宋戦の末期、南宋残党の掃討戦にあつて大きな貢献をしたからでもあるが、それだけでなく、元朝が西域人（色目人）を活用するというモンゴル朝の伝統を重んじたからであろう。

こうした外国商人の活用をはかりながら、元は南海諸国との直接交流に乗りだした。安南国（北ベトナム）・チャンパ（南ベトナム）・緬国（ミャンマー）に兵を進めて服属させ、入貢を迫った。スマトラ以西のベンガル湾沿岸の諸国、インド南東端・西南端の諸国には使者を送つて入朝を勧めた。こうした元朝の積極的姿勢は、南海貿易を発展させると同時に、それを支える国際市場を前代以上に隆盛化させたのである。

広州・泉州・杭州・明州（寧波）のほかに、あらたに温州・上海が国際市場となり、それら新旧の境域市場を通して熱帯地方・西方の特産物（香辛料・宝石・宝貨）が中国国内にはいりこんだ。

元代の遠隔地貿易の特徴は、海路によるものだけではなかった点である。元朝は陸路と海路を結びあわせ、両者を循環させる貿易を行なったのである。宋代陸路と、その沿線に生まれた境域市場は中国の西北部に位置した西夏におさえられ、そこでの通商はほそそとしたかたちで営まれるしかなかった。元は、これをかえたのである。

モンゴル帝国はかつてオルホン川上流域にカラコルム（和林）という都城（首都）を築いていた。そしてそこを

中心に占領地や属国の主要都市を結ぶ公道を整備し、宿駅を設け、ジャムチと呼ばれる駅伝制度を完成させた。このシステムは政治的・軍事的利用のためにつくられたものだったが、いつしかそれはアジア内陸部を貫いて、人・モノ・情報を交流させる大流通経路に変貌した。モンゴル帝国はやがて四つのハーン国に分裂するが、分裂後もこの幹線ルートは消えなかった。

元朝はそれを受けついだ。そしてもつとも西にできたイル・ハーン国の首都タブリーズ（イラン北西部）と元の首都大都を結ぶ中央アジア経由の陸上ルートを機能させつづけた。それだけではない。この陸路を、ペルシア湾のホルムズと中国福建の泉州その他の港湾都市とを結ぶ海上ルートに連結させ、アジアを循環する交通路にしたのである。

アジア循環ルート上には大きな境域市場が出現した。ヴェネツィア商人マルコ・ポーロも、モロッコ出身のアラブ人旅行家イブン・バットゥータもこれらの市場を歴訪しながら元朝下の中国世界に足を踏み入れた。元の支援を受けた遠隔地商人たちもこの国際市場を遍歴しつつ、異境の産物の豊かな調達をはかったのである。

### 宋を越える豊かな配分

国際市場の進化、それがもたらす多量の輸入品の流入は、中国各地の産業の発展を促した。それによって各地の特産物が大きく流通していくが、それを支えたのも元朝である。

元朝の首都（大都）も、その直轄地も大きく北に傾いていた。元朝はこの北偏の畿内に全国各地から集めた巨額の正税（糧米）・課利（現金）をもちこんだ。運びこまれた糧米・現金は帝室や政府の物資の買いつけ、諸王や官吏の支出というかたちでふたたび地方に還元され、それと引きかえに各地の産物が首都に集中した。

元代、この公課と物資の循環がもつとも活発に行なわれたのが大都と江南とのあいだであった。江南は、南宋以来すぐれた特産物を豊かに産出する一大産業地帯で、元代もつとも発展をとげたところだったからである。

元朝は、首都と江南を結ぶために二つのパイプを準備した。一つは運河である。隋の開削によってできた、中国を縦横に連絡する大運河は、宋代、金・宋の対立によってその機能を失っていた。元はこれを復活させた。そしてあらたに淮安わいあんからまっすぐに北上する斉州せいしゅう運河を開き、これによって大運河を首都大都まで延長させたのである。王朝はまた大都とその周辺諸都市を結ぶべく、会通河かいつうが・通惠河つうけいがを建設した。

いま一つは海路である。元朝は長江河口の劉家港りゅうがこうから山東半島先端沖・渤海湾ほっかいわん上を通り、白河河口はくががの直沽ちくこにいたる海上輸送路を整備した。

この二つの大流通経路を使った物資の輸送・買いつけを担ったのが、江南商人に代表される私的商人である。利益をめざす彼らの流通戦略によって江南の糧米が、福建の綿布・紗（建州）・砂糖（福州）・臘茶ろうちゃ（建州）が、浙江の綿布（松江）・綾（蘇州・湖州）・砂糖（明州）・茶（湖州）・酒（紹興）・紙（徽州）・銅器（湖州）・漆器（温州・湖州）・瓷器（處州）<sup>(6)</sup>が、江西の茶・瓷器（饒州）<sup>(6)</sup>などが、首都大都の市場をめざして北上したのである。

南北の人・モノ・情報の循環は、それを基軸とする東西の流通を促した。これによって中国各地の境域市場・都市間市場・都市市場はかぎりなく進化をとげた。そのネットワークは、宋代のものよりもはるかに規模が大きく、密度の高いものとなった。元はこれによって中国世界における商業文明Ⅰの可能性を拡張、どこよりも多くの都市民に異境の産物を豊かに配分したのである。

しかし元朝は、商業都市市場を越える全国的市場を形成し、商業文明をⅡ段階に引きあげるほどのエネルギーをたくわえることはできなかった。元の命運が尽きるときがやってくるのである。

征服王朝がかかえていた不安定要素が表出し、元はモンゴリアと漠地とのあいだで後継をめぐる果てしない権力闘争をはじめていく。際限のない闘争は民衆に対する苛斂誅求を生みだし、それが人々の不満を高めていくのである。

とりわけ不満を圧縮させたのは、冷遇を受けつづけた江南だった。そこから反乱が起こった。反乱勢力によって豊かな江南をおさえられてはひとたまりもない。江南勢力の北伐によって、元朝は朽ち木のように倒壊してしまう。世祖フビライ・ハーンが南宋を滅ぼしてから百年に満たない、一三六八年のことであった。

中国世界はこのあと、明・清という二つの帝国を出現させる。両国は宋・元よりもずっと大きな中央集権国家を形成し、豊かな商業文明Ⅰを実現する。しかしいずれも、商業文明Ⅱの形成には向かわないのである。

#### 4 明・清帝国

##### 明の国家貿易

明（一三六八—一六四四年）は、元朝に対する反乱のなかから登場した貧農出身の漢人、朱元璋（しゅげんしやう）（洪武帝・在位一三六八—一三九八年）によって立てられた王朝である。明は元の支配を引きついだ。元は草原より興った北狄（はいてき）が立てた征服王朝であるが、明の創設者は、元朝を異国の支配者だとは考えなかった。元朝もまた天がその命によって中国を支配させた王朝の一つと見なし、元王朝の天命が尽き、天があらたに自分たちに命を授けたというかたちをとって中国の支配者となったのである。

明朝の版図は、北は満州南部からモンゴリア、西は甘肅から雲南、南は広東・広西に広がるものだった。漢・唐王朝をうわ回る漢民族帝国の出現である。この巨大帝国の統治にあたって、明朝は元の支配体制の一部を継承し

た。元朝時代のモンゴルの風俗・慣習の一掃をはかりながらも、その武を重視する体制を受けついだ。そして宋代の伝統的な儒教の理念、それにもとづく諸制度を復活させた。こうして明は元・宋二つの体制を統合し、中央・地方の行政機関ならびに軍事組織を皇帝が直接統轄する独裁的中央集権体制を確立した（この政治体制はつぎの清朝にも踏襲された）。

明帝国もまた建国と同時に、ユーラシア大陸を舞台にした国際貿易市場に乗りだした。しかしそのやり方は、宋・元時代とは大きくかわらざるをえなかった。元朝末期以来、東アジアを舞台にした貿易の体制が変貌をとげていたからである。

元王朝の政治・軍事が支えていた秩序が王朝の倒壊とともに崩れ、朝鮮半島・山東半島・福建・広東までの海域が、武装商人による海賊貿易―倭寇<sup>わこう</sup>―の支配する世界にかわっていた（この海賊貿易は一四世紀から一五世紀初頭までの前期と一六世紀の後期とに分けられるが、当初それを主導したのが日本の海賊商人団―倭寇―であったところから、中国や朝鮮の史籍では倭寇と呼ばれた）。

明王朝は倭寇を制圧し、東アジア貿易圏に一つの秩序をつくりだすために、海外貿易を国家管理下に引きもどした。海禁令を敷いて中国の私的商人の海外渡航を厳禁し、貿易を中国に臣属した諸国との朝貢貿易のみに限定した。王朝は宋・元の諸制度を受けつぎ、広州・泉州・寧波<sup>にんぽう</sup>に市舶司をおいたが、それはもはや私貿易を管理するものではなく、臣属諸国との朝貢貿易を管轄する機構となった。

貿易の国家管理がなされたのは、東アジア世界についてだけではなかった。明は永楽帝（在位一四〇二―一四二四年）の時代に、宋・元代を通じて私貿易を発展させてきた南海貿易（南シナ海からインド洋周辺におよぶ貿易）までも国家の貿易にかえたのである。

永楽帝は、その治世下に六回、鄭和を司令官とする国家貿易船団を組織した。船団は数十隻の武装船と二万数千人の乗員を擁する大編成で、その巡航先はジャワ・スマトラ・インド南端部から、ペルシア湾頭のホルムズ、さらにはアフリカ東岸にまでおよんだ。第五代皇帝宣宗（宣德帝・在位一四二五—一四三五年）の時代には、七回目の国家貿易船団が派遣された。

こうして明は遠隔地貿易を国家の手で組織しつつ、異境の産物を取り入れたのである。

### 商工業都市の発展

国家による遠隔地貿易の進展は、当然のことながら国内における諸産業の発展を促し、さまざまな特産物を生み出した。綿花・綿布、生糸・絹織物、米・麦、茶・砂糖などがそれである。これらの手工業品・農産物の国内流通を担ったのは、多くの場合明朝と手を結んだ政商だった。その代表的グループとして知られているのが、「山西商人（出身山西省）」と「新安商人（出身安徽省徽州府・旧新安）」である。国際貿易を国家管理に引きもどした明帝国のなかで商人として生き、営利を追求するには行政と密着せざるをえなかった。彼らは官職を金で買ったり、子弟を官界に送ったりして政府の財政・専売事業にかかわりつつ、中国各地の農工業生産品を境域・都市間市場のネットワークに流通させたのである。

これとともに都市が大きく成長をとげた。洪武帝の時代、国都は南京（応天府）におかれた。永楽帝の時代には、国都は元朝が首都をおいていた北京（順天府）に移された。この新旧二つの首都はけたはずれに大きな商業都市となった。北辺の軍事的消費都市、大同・宣府、南の流通都市、南昌・杭州・福州・広州なども大都會を形成した。

一六世紀にはいると、手工業都市といった性格をもつ都市があらわれてくる。綿布の都ともいべき松江、生糸や絹織物で栄えた湖州・嘉興<sup>かこう</sup>、塩業の中心地となった揚州がそれである。また宋代に発展した江南デルタ平野の中心都市、蘇州もまたこの時期には絹織物業を中心とする手工業都市として、さらには大商業都市として中国随一の繁栄を示した（一六世紀末、蘇州の人口は百万に近かったと推定されている<sup>(7)</sup>）。

それだけではない。すでに宋代（一〇世紀）に農村の定期市から発展した都市的集落、鎮あるいは市も、一五一六世紀には農村における綿業や絹業の発展に支えられて大集落、小都市に成長した。しかもこれらの小都市は商取引の中心地をなしたばかりでなく、おのずから手工業都市的性格をもつまでになった。

こうして明は、これまでのどの王朝もおよばぬ多様な都市を数多く形成しつつ無数の都市民を育み、その彼らに異境の産物を豊かに配分したのである。

#### 商業文明Ⅰのままに

明代農村も大きく変貌した。銀を中心とする貨幣経済が浸透し、手工業生産の舞台になった。四川・湖広<sup>ここう</sup>・江西・浙江・福建各地では茶、福建・江西では藍、四川・江西・福建・広東<sup>かんし</sup>・広西<sup>かんし</sup>ではサトウキビなどの商品作物が栽培された。

農村で特別に大きく発展したのは綿業・絹業だった。宋代末期に中国に伝えられた綿布は、明代になると在来の麻布を押しつけ、もともと普遍的な大衆的日常衣料となるが、その綿布の原料となる綿花が商品作物として各地の農村で栽培されるようになった。

中国では絹業の歴史は古いが、これまで生糸や絹織物が農村で大量に商品として生産されることはなかった。そ



れが一五——一六世紀になると、江南デルタ平野の農村では、商品生産をめざす絹業が發展をはじめていたのである。

綿業・絹業をはじめとしてさまざまな商品生産の重要な舞台になった農村では、農民が異境の産物の豊かな享受者になる可能性をもっていたはずである。しかし専制国家はこの時代の最大の庶民、農民を消費者にしていく道を拓くことはなかった。

農民を消費者にする全国的市場を形成するには、資産をたくわえ、生産や生活の向上に意欲をもつ無数の農民の存在が欠かせない。また農民に生産用具・原材料・生活用品を適正な条件で供給する多数の私的な商工業者の存在が欠かせない。しかし国際貿易を国家が管理し、国内流通を政商が握ることによってつくられてきた明朝の市場システムにはそうした存在を育む余地はほとんどなかった。

明朝末期の一六世紀後半から一七世紀はじめにかけて、中国世界が商業文明Ⅱへと進化できる一つのチャンスが訪れた。後述の西ヨーロッパと日本列島が商業文明Ⅱへ向かいつつ、中国そして東南アジア・インドとの貿易をめざして東アジアに集中し、中国海域がはなやかな国際貿易の表舞台となったからである。

明廷はこの変化に応じ、一五六七年「海禁」をやめ、私貿易の再開と中国人の海外渡航を認めた。日本が東南アジアに派遣した御朱印船との貿易、スペイン・ポルトガルなど西ヨーロッパ勢力が行なった国際貿易にも参加した。

しかしこのときすでに明帝国は衰運に向かっていたのである。政商・高利貸し・地主は生きのびようと、農民に對する収奪を強めた。国家は財政の悪化を食いとめようと、人々に重税を課していく。その反動が起きないわけがなかった。

農村では綿業や絹業などの商品生産に従事する小農民が、政商・高利貸し・地主の収奪に対する抵抗運動を開始する。都市では小商人・手工業者を中心とする民衆が、国家の重税に反対する闘争を起こしていく。農村・都市における闘いはついに大規模な農民反乱に発展し、明帝国は内部崩壊していくのである。

#### 清もまた同じように

明にかわつたのが、清帝国（一六四四—一九一六年）である。清の源は、中国の北東部（遼東・満州）を本拠に採集・狩猟・素朴な農耕を営んでいた女直（じよとく女眞）である。彼らは明代には遼東の地にあつて、明廷の統治下におかれた。明の衰退がはじまるとそれに立ちむかい、国号を「大清」たいしん、民族名を「満州」と改める。やがて明が農民反乱によって崩壊するや、それにかわる中国の支配者、清となるのである。

清は中国本土だけではなく、満州・内モンゴル・外モンゴル・新疆・チベットを手中にし、さらに朝鮮・ベトナム・シヤム（タイ）・ビルマ（ミャンマー）を藩属国とした。そしてこの広大な世界を、皇帝を独裁者にして支配する巨大帝国に仕あげたのである。

清朝は異民族の支配王朝として中国に君臨したが、元朝のような民族主義—モンゴル至上主義—を振りかざさなかった。清は満漢併用の体制をとりつつ、中国の伝統的王朝の後継者としての立場を貫こうとした。

清帝国は明朝の体制を受けつぎ、国家の力によって市場を創造・運営しようとした。帝国は遠隔地貿易を国家の管理下においた。南海貿易を広東省の廣州一港に限定し、その通商を特定の仲買商人—がこう牙行—の組合、公行（俗に広東十三行と通称された）だけに請けおわせた。彼らを使って輸出入をコントロールし、それによって銀を大量に獲得しようとしたのである。

そのためには、国内に輸出製品を生産・流通させるための市場がつくられねばならなかった。明代すでに中国では、綿業・絹業に代表される衣料産業が高度に発展していたが、清はこれを国家の管理下におき、国家にしたがう特権商人の手を使って製品を市場化する政策を選択した。

農村はこの政策によって、手工業生産の重要な舞台になり、農民はその大きな担い手となった。これとともに農民は商品生産者として、それが生みだす所得によって異境の産物の豊かな配分にあずかれる可能性をもった。しかし明代と同じくこの清朝下でも、それが実現されることはなかった。専制国家が管理した市場は、国家ならびにその御用をつとめる特権商人、高利貸し・地主の支配から農民を解放するはずがなかったからである。直接の生産者に公平な利益を約束するはずがなかったからである。

中国世界は清の時代にもまた、国家を単位に、国民を対象に異境の産物の豊かな配分を実現する商業文明Ⅱの形成には進まなかった。集中原理をその文化の基層にもつ中国世界は、商業文明Ⅰを維持したまま、その可能性を極限まで広げる道を選択したのである。そしてそれがために一九世紀、西アジア・地中海と同じように、さきに産業文明Ⅰを拓いた西ヨーロッパ列強・ロシアの進出・侵略を受けることになるのである。

### 三節 西ヨーロッパ

#### ノルマン人の移動

すでに見てきたように、主要二地域の商業文明Ⅰづくりは中央集権国家（帝国）の建設によって行なわれたが、西ヨーロッパにおける商業文明Ⅰの形成はそれと対照的な分権的体制、つまり主従関係をベースにした封建国家の建設によって進められる。しかもその封建社会は、後述の日本のものともまた対照的である。日本の封建制が一国

を単位とし、融合原理に支配される分権システムとなったのに対して、西ヨーロッパのそれは、複数の国々が分立・対決しあう国際的分権体制になり、契約の原理にもとづく分権システムになった。

西ヨーロッパを特徴づける封建社会の形成は、九世紀後半、カロリング朝フランクが西ヨーロッパの主要部分に形成した巨大統一国家、フランク帝国の分裂、さらにはイングランドにおけるアングロ・サクソン諸王国の崩壊とともにじまる。

分裂・崩壊は無数の小勢力をつくり、それらがはげしく対立しあう分立世界を誕生させるが、それをさらに激化させる事件が発生する。第三波の民族移動、ノルマン人の移動である。

ノルマン人は、スカンディナヴィア半島やデンマークの沿岸地帯を故国とする北ゲルマン人に属する。彼らは変化に富んだ海岸線がつくりだす深い入り江、ヴィークに住んだことから、それにちなんでヴィーキングー、あるいはヴァイキングとも呼ばれた。

これに先立つ第一・第二波の民族移動のとき、ノルマン人は動かなかった。彼らは、北欧の海岸地帯に分散し、農耕や漁労、交易や海賊行為を生業に部族単位で暮らしたつづけたのである。やがて八世紀、彼らのあいだに統一王権が生まれ、スウェーデン・ノルウェー・デンマークといった国家の形成が進んだ。このとき王国の建設に参加しなかった者も多く、それらが八世紀末から九世紀初頭にかけて、小首長を頭にヨーロッパ各地に向けて移動をはじめたのである。

### 大混乱・無秩序

最初彼らの移動は一年単位の略奪行だったが、九世紀末以後平和的な交易の展開をめざし、定住するグループが

あらわれるようになる。彼らはロシア・アイスランド・グリーンランドといった人口希薄地帯だけではなく、西ヨーロッパの文明地にまで進出した。

一〇世紀初頭にはフランスのセーヌ川下流域に定住し、以来ここをノルマンディー地方（ノルマン人の地）と呼ばせるようになる部族集団、一一―一二世紀にはジブラルタル海峡から地中海にはいり、南イタリア・シチリアに進出し、王国―両シチリア王国―を建設する部族グループもあらわれた。

イギリスに押しよせたのはノルマン人の一派、デーン人である。彼らの攻撃はげしかった。進入するデーン人と迎えうつアングロ・サクソン人とのあいだで、なんとか王朝が交代した。その交代劇に終止符を打ったのが、フランスのノルマンディーに定住し、フランス王の家臣、ノルマンディー公になっていたノルマンの子孫、ウィリアム一世（征服王・在位一〇六六―一〇八七年）である。彼は、アングロ・サクソン王を倒してノルマン朝を創出し、イギリス王となる。これが「ノルマン征服」と呼ばれる出来事である。

アングロ・サクソン時代、イギリスはまだ大陸とは別の道を歩んでいた。それが、ノルマン征服とともに西ヨーロッパの一員になっていくのである。征服王ウィリアムがイギリス王となったあとも、フランス王の家臣、ノルマンディー公でありつづけたからである。イギリスとフランスのこの関係は、「百年戦争（一二三七―一四五三年）」までつづくことになる。

ノルマン人の移動は、こうした大規模なものではなかった。それと平行するように、小集団の定住が数かぎりなく進行したのである。移住したノルマン人は（そして故国に残ったノルマン人も）、やがてキリスト教徒になった。彼らは西ヨーロッパ人に同化し、この時代にはじまろうとしていた新しい西ヨーロッパ世界の形成に参加しようとしたのである。

ノルマン人の参加は、西ヨーロッパを北に向けて大きく拡大させることになったが、襲撃をともなう彼らの移動は、旧秩序瓦解後の分立世界を大混乱に陥らせた。無秩序は、彼らの定住が完了する一二世紀までつづくのである。

### 世俗権力

封建システムと呼ばれる一つの社会秩序は、この長い無秩序のなかで形成される。その原動力となったのが二つの主要勢力である。一つは世俗権力（皇帝・国王・封建領主）、いま一つは聖界権威（教皇・司教・修道院長）である。

両勢力はそれぞれ別々の役割をもち、最初から別系統の存在として登場した。その両者がノルマンによる無秩序に立ちむかいながら、それぞれの世界で、相互のあいだに対決関係をつくりだす。二勢力によるこの二重の対決が封建と呼ばれる分権システム形成の温床となるのである。

ノルマン民族の移動がつくりだした混乱状態に大陸の世俗勢力はどう立ちむかったのだろうか。フランクの諸王は無力だった。ほとんど抵抗らしい抵抗を示さなかったのである。その国王たちにかわって立ちあがったのが、地方の小権力者たちだった。彼らは城砦を築き、ノルマン人の襲撃から農民や都市民をまもった。

小権力者の支配領域は王と比べて小さかったが、庶民を引きつけた彼らの支配力は充実していった。やがて彼らは王の支配から自立し、たがいに排他的な、独占的な支配領域を形成するようになった。そうした小勢力に与えられた名称が封建領主である。

封建領主の登場とともに国王の権力は弱まり、一〇世紀末（九八七年）、カロリング王朝も断絶することにな

る。東西のフランク王国には、あらたな王家（フランケン家とカペー家）が推挙され、王位についた。こうしてはじまるのが、ドイツ王国とフランス王国である。

皇帝の権力もまた弱体化した。東フランク王国の消滅後、皇帝位はいったんとだえてしまう。やがてザクセン家のオットー一世（在位九三六―九七三年）の時代に復活し、彼を始祖とする帝国が形成される。神聖ローマ帝国（九六二―一八〇六年）である。神聖ローマ帝国はカール大帝の開いたフランク帝国と違って、全ヨーロッパを支配する帝国ではなかった。その支配領域はドイツとイタリアの一部にかぎられ、皇帝位はドイツ国王が兼ねることになるのである。

#### フランス・ドイツ・イギリスの場合

国王と地方勢力⇨封建領主の関係は、フランス王国（西フランク）とドイツ王国（東フランク）とでそれぞれ違っていた。フランスの場合、封建領主の出身はさまざまだった。フランク王国の家臣、司教・修道院長、あるいは豪農自由民から興った者もあった。その支配領域も多様だった。たった一つの城砦しかもてない者もいれば、複数の城砦をもち、城代を派遣して支配にあたる者もいた。

西フランクの国王に推挙されたカペー家の権力は、パリとオルレアンを結ぶ地域に限定された。国王といってもカペー家は一つの地方政権だった。カペー家はその地方政権から出発し、しだいに王権を拡大し、世襲相統制を確立していくが、国王が絶対的な存在になることはなかった。その周囲では、無数の封建領主が王権から自立して存続したのである。

ドイツの場合封建領主の出身は、フランケン・ザクセン・バイエルン・アラマンなどの旧ゲルマン部族の長、部

族太公にかぎられた。ここは古ゲルマンの伝統を強く残した世界で、諸部族がそれぞれ固く内部結束をしつつ相互にきびしい対立をつづけ、部族内部にあるいは部族間にあらたな地方勢力を登場させる余地がなかったからである。

したがってドイツでは、フランスほど地方勢力の分断は進まなかった。しかしここでは、部族太公がそれぞれ封建領主として分立しあい、自己の太公領に複数の城砦をおき、それを拠点に庶民を支配する体制ができあがったのである。部族間の対立はきびしく、ここには強大な王権を生む余地がなかった。王の権力がおよぶ世界は、みずからが部族太公をかねる地方にかぎられ、しかもその王権は、つぎつぎと別の部族太公家に譲りわたされていくことになるのである。

イギリスの場合は、フランスともまたドイツとも違っていた。ここではノルマンの征服王朝ができ、それを中心に中央集権化が進められたからである。長期にわたるアングロ・サクソン人とデーン人の抗争は、地方の小権力の成長を大きく促す結果となった。彼らもまた城砦を中心に、その地域の庶民を支配する封建領主となった。それを征服したのが、前述のウィリアム一世だったのである。彼は、征服とともに封建領主たちのうえに君臨し、彼らのみずからの家臣として宣誓させた。

しかしここでもまた国王を頂点とするピラミッド型の支配体制はできあがらなかった。領主たちが、フランス国王の家臣を名乗るイギリス国王の臣下になることにはげしく抵抗したからである。そのためイギリスでは、かぎりなく分権志向的な集権システムが育まれたのである。

このように、フランス・ドイツ・イギリスはそれぞれ異なる事情をもっているが、王が封建領主たちに対して絶対的な権力者ではなかったという点で共通している。それは、王が大きな支配領域をもてなかったことに由来する



が、実は彼らの権力の源泉そのものが不安定だったからである。

### 血統権原理・選挙原理

西ヨーロッパでは、国王の選出に関して二つの原理が支配した。血統権原理と選挙原理である。つぎの国王を決定するとき、特定の王家がもつ血統の権威はもちろん重要であつたが、しかしそれだけでは十分ではなかつた。西ヨーロッパでは、豪族たちによる国王選挙が大きな役割を演じたのである。

二つの原理はいつも同じ比重をもっていたのではない。ときどきの政治情勢に応じて、どちらか一方が優勢になった。国によつても違いが生じた。

ドイツでは、血統権原理と選挙原理の二つの組み合わせのうち、選挙原理のウエートをかぎりなく高める方向に向かつた。はじめはカロリング家の血統を引く者が選ばれていたが、やがてそれに拘束されなくなつた。別のファミリーを交えた自由選挙が支配的になるのである。こうした選挙原理の定着は、複数の国王を並存させる危険性を生みだした。実際ドイツでは、正統と見なされる国王のほかに、対立国王が選出される事態も生じたのである。

これと対照的だったのは、フランス・イギリスの場合である。どちらの国も血統権原理のウエートを高め、王権の世襲相続の確立に向かつた。ただしフランスやイギリスの世襲制は、日本の天皇・將軍のそれとは違つていた。血統にも制約がつけられたのである。日本の場合、直系の子孫でなくても血のつながりさえあれば、その濃淡に関係なく相続人になれた。ところがフランスやイギリスでは、世襲相続は直系の子孫にかぎられたのである。直系の子孫でない者が国王に選ばれた場合には、それは新王朝の創設となり、もとの王家は断絶させられることになるのである。

世襲制が確立しても、それにはきびしいコントロールがついていた。それを可能にしたのは、選挙原理だった。イギリス・フランスでも選挙原理はその基底に生きつづけ、それが復活する可能性をいつでも有していたのである。

このように西ヨーロッパの血統権原理と選挙原理の二つの組み合わせは、封建領主に対する王権の行使にきびしい制限を加えたのである。その意味では国王もまた、城砦を中心にそこに住む人々を支配する一つの、より大きな封建領主に過ぎなかったのである。

こうした大小さまざまな封建領主が、ノルマン人の移動によって混乱状態に陥った西ヨーロッパの各地にそれぞれ独立の権力主体として分立・対決したのである。

(次号⑦へつづく)

- 注 (1) 家島彦一 (著) 『イスラム世界の成立と国際商業』 岩波書店 一九九一年 二二三ページ  
 (2) 家島彦一 (著) 『イスラム世界の成立と国際商業』 岩波書店 一九九一年 二六四—二八九ページ参照  
 (3) 家島彦一 (著) 『イスラム世界の成立と国際商業』 岩波書店 一九九一年 二二六ページ  
 (4) 家島彦一 (著) 『イスラム世界の成立と国際商業』 岩波書店 一九九一年 二七三—二七九ページ参照  
 (5) 周藤吉之・中嶋 敏 (著) 『五代・宋』 講談社 一九七四年 三七九—三八〇ページ  
 (6) 愛宕松男・寺田隆信 (著) 『元・明』 講談社 一九七四年 一五九ページ  
 (7) 愛宕松男・寺田隆信 (著) 『元・明』 講談社 一九七四年 三九三ページ